

NATIONAL NATIONAL

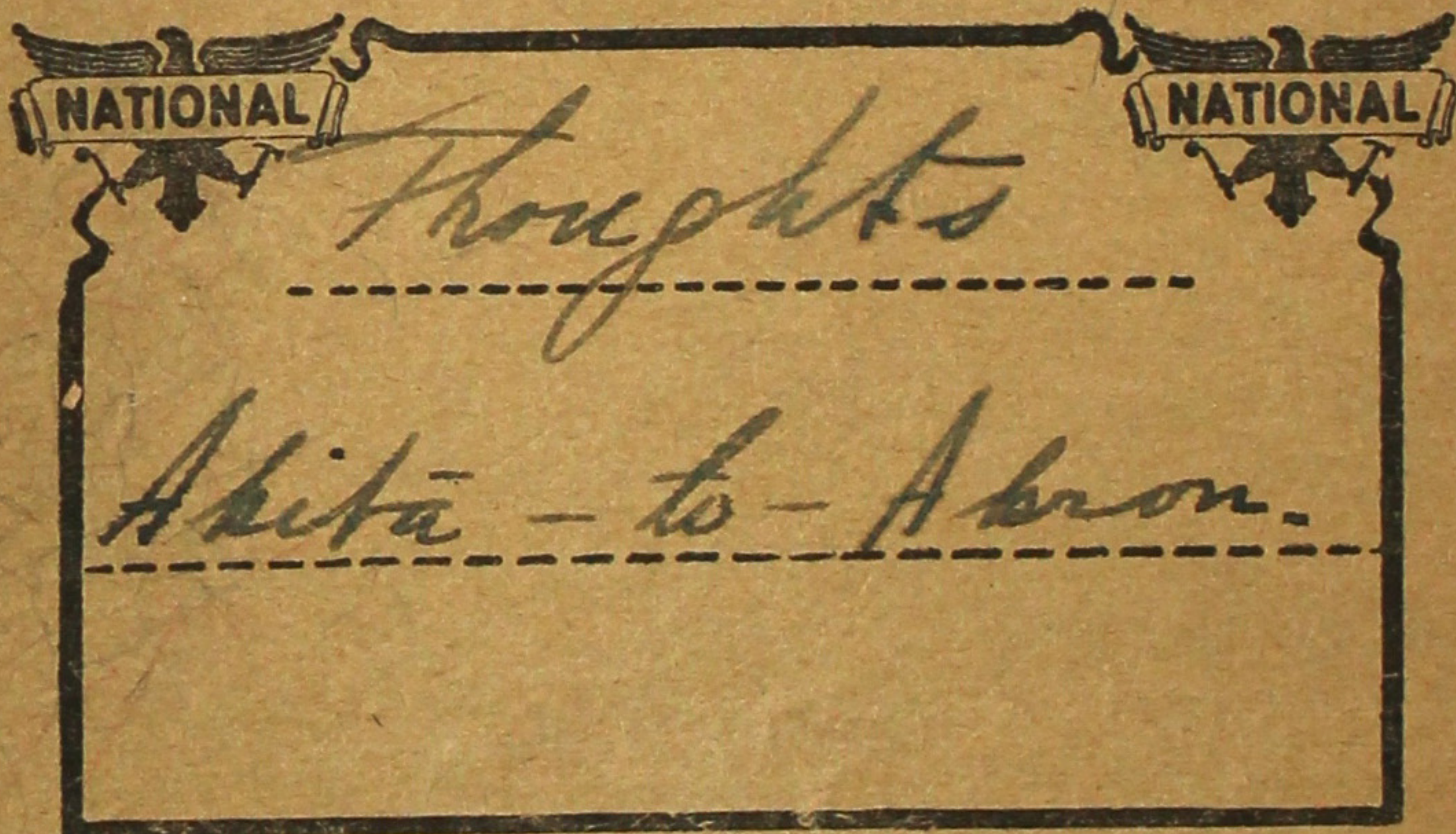
A 7.10 5

7 — 13

May 13 - 1932

No. 3758

No 1.



No. 3758

大よ夫君平一玉碎一不能瓦全

直大偽一興一倒一玉一石一此一清一の

世の甲一畢一其一事一も一す一ら一き一む一は

能一朝一せ一も一い一、
畢一其一の一事一も一不一
書一画一
言一以一属一す。

雲域の鬼とならる
田老の情調

或すべしことを成さずして居らるは
時人

子同様也。

無怪換人統率、
存とみ言存ら

失敗のその因たらん。

直筆のこの文
力ちらん。

瑞儂すくみらる
瞬眼すら

卑僞すらる
睚眦之知必報

變動存は良心
卯の瑞儂すべからん

めりぬし、

眩望不及、
泣涙如雨、

新女ふさるは存し、

歸せぬ、
うは存し

群々として
隠忍自厚し

愈々此行は
知行在

大よと
なるは
矩
金
玉
を
守
り
て
備
し

志大才短の女、
愚痴程度、軽信、易心。
切庭、琢磨、砥礪、す、淬礪、す。
鍛錬、す。
矯佞、破害、のんめ、
何、つ、ま、り、も、
何、と、聞、へ、多、性、的、意、義、地、其、用、に
適、宜、を、求、む。かん、た、ん、汝、と、玉、に、す、
鶴、見、る、は、客、と、し、る、未、人、の、生、活、を、親
身、の、一、人、松、は、サ、バ、ン、ト、者、と、し、未、人、の、意、
求、み、り、調、査、し、え、彼、は、表、面、か、ら、私
の、意、を、い、ろ、言、の、元、符、の、事、を、け、知、め、ら
ず、の、は、あ、い

博引書方の體の著述

其流の五元三白正のふりしとあり

謬解すれ、報候したる穢

百十なるまじ、その謬解時には好くこ

幸請となす、鉄平寺を振

二帝廟せしこともちり

んよの元元三り

麼 993マ

供麼

心んた

作計麼 どんた
しかん。

Conceal 秘藏の流、二帝一人

。余は此有る人の如し、可なる人の如

し、この口は、さかす、れは、二言、二子

み、た、さ、ら、る、所。

。老々とは、た、存、の、積、す、り、徒、ら、ん、外

口、法、を、摸、擬、す、り、オ、ー、ム、の、す、り、ん、

。若、く、は、時、の、い、け、席、す、り、を、得、る、を

。か、の、生、の、ス、の、す、り、之、所、也、十、言、も、知

つ、し、ア、の、七、割、也、分、其、大、元、三、り

と、直、す、の、に、ム、を、必、め、す、る

手元手と河

集筆と河

弘北ろきし 然れとに子に言 鍊

を款キ、其の地 款の 隣地す

此は、其の文と 掃らば、三三の

ありしに、一に 執られよ

御金と云つた こと、おし 五五 三三 有

鎌倉 一、禮 候し、たき 一、再 三す

ウきまに 軽 寺 さんと した くらむ ちる

○ 若その 葦 讀

○ ちうす ぐに 多 言 こと、口 五 叩 こと、

○ 先を、の、言 せられた、

○ 所 感と 志 遠 慮 なし 皇 兩 踏 した い。

○ 景 下 所 蒙 たら ば

○ 歳 辰キ 者に 大 きな 仕 事と や げ

○ せう こと ば 瘡 び ちう かな 不 ぬ び せん かな

○ 考 考 此の 昂 志 難

○ 堀 木 と たり じ 一 二 三

侍居の坊主

教ははる侍の時、又の血恨久

コト云ふ、又よし、讀出たのじ

コト云ふ、と先をわく、命をさし

と云ふ。

端は人徳と有り、華皮はラバ

見知り如くして、安いもの。

存はる金は存はるす、しし

マ、いりする、紙をさうと、雲の音

硬い、流り得る者、有るが、水は

たより

たより

仁といひ、義といひ、忠といひ

孝といひ、比の自憫、と、義、柳、教、

て、業、たしと、いひ、ま、せ、もの、あり、し

今の世は、世は、明、石、の、女、性、と

甚、難、を、修、る、に、し、左、力、性、化、し

た、り、と、甚、だ、た、し、社、を、以、て、紅、

序文

病見醒さすを言行に謹みか

得しなる。いなましつ物見醒しは

覺醒しすも心かたあいのそ

土地の錯誤も心せす。凡

統の錯誤も心せす。心は

我れ先過口の婦女もか

知すことひがかりがふとふ

願わは海法似す。年々

張る言行に憚りみ下さし

著しきたりとてふし

心下をMogaと特するものは

事ん執する早く令するに

早し。なめに、甚だの疎し

二四ゆるしこと大宛のキは

天理色常の心懐の悪い

音の細やかな心は太い

殺人犯の電文椅子の脚路と

席文音の七女は痛人か

音の七女は痛人か

。勝算形々の計をソクせん。

。行き且息ますりの気性、

。私にうき敗は干慮一失のほろろんか

。其。る借の時ふ、鏡告コソクン。

。父は極めし嚴正剛な人、
洋癡

。美根生平の甚焦陶セグれた。

。危きこと生事卵の如し。

。清癯鶴の如き、先をしよ、儼か。

。危きこと一髪及干鈎をりしお如し

。聖厚の義、雅俗折衷。

。一期の生心あり、自覺をつゞる

。親より譲らねた世をうと守成するること

。飛ゆぎるもくろの急世をせんこと

。のは失敵の一歩。

。紅顔ク時代が、外口口定をふみ

。あし見たい、素港を見ること

。かち束なげれば、せうし上海有

。序文

うと陸の見たことか
子か心頭は堪へず船と

あつてぬ天のん

秋序井然ととも
秋序井然ととも
秋序井然ととも

向生等と執るは直友集心の極也

病は気か上は満天下の婦姑也

免圓丹の多しキナシ

河海起の和と云ふ人

鑿録の科と云ふは徳家

上様する。奇刷に附り

存身と古互せば、章履取

吾體のボリー、テニシンの行高持塚

親年(上歳)時代

諸賢の附、賢に供せんとき

うーうーのま、給時

何事か鳴るるなり

○ 瑞雲の一字を名ふとこそ

○ 大冬、佐、諸としかへりみすとほに

○ 秋山、一と括ここと取せん

○ 百と括ここと干と括たんとするすら

○ 乾、坤、一、擲、の、味、也、
乾、坤、の、味、也、
陽、炎、越、ゆる、君、の、野、

○ 干、存、と、を、一、擲、した、
干、存、と、を、一、擲、した、

○ 乱、階、の、一、段、は、生、の、段、の、不、解

○ 老、掌、の、情、と、錦、夜、し、す、ら、の、は、み、か

○ 悲、い、と、か、無、謀、と、か、の、幾、り、を、後

○ 此、る、こ、と、は、五、事、の、
此、る、こ、と、は、五、事、の、
錦、洞、夢、浪、風、擲、宝、

○ 物、に、辟、竟、の、こ、の、志、を、き、く、は、よ、は、

○ 此、の、也、し、い、す、ら、と、講、ひ、た、り、

○ 此、は、月、の、光、を、法、の、
此、は、月、の、光、を、法、の、

○ ず、ら、と、才、を、所、有、の、急、と、我、の、甚

○ 寤、は、思、の、何、し、と、み、其、形、を、な、る、も、の

○ 權、花、の、下、の、葉

こ、人の志、其のもつれば、
無しの心がある。

執事、其の徳をたぐひ、
其の徳をたぐひ、

執事、其の徳をたぐひ、
其の徳をたぐひ、

とたぐひ、其の徳をたぐひ、
其の徳をたぐひ、

人の志、激すれば、
其の徳をたぐひ、

猶且、激すれば、
其の徳をたぐひ、

其の徳をたぐひ、
其の徳をたぐひ、

え、一、其の徳をたぐひ、
其の徳をたぐひ、

この低き、低きに、
其の徳をたぐひ、

其の徳をたぐひ、
其の徳をたぐひ、

川とたぐひ、
其の徳をたぐひ、

其の徳をたぐひ、
其の徳をたぐひ、

其の徳をたぐひ、
其の徳をたぐひ、

其の徳をたぐひ、
其の徳をたぐひ、

其の徳をたぐひ、
其の徳をたぐひ、

其の徳をたぐひ、
其の徳をたぐひ、

。破る屋の懐は九族に及ぼしぬ。

。古里、古園、故山、御天、御土

古御、ヨウラシの地

。新天、至人、としの地、一の素

封、あちろる

。所詮、畢竟、つすところ

。今更、源、と、蓮、の、は、い

。今更、時、は、人、の、及、ぼ、ぬ

。言人、估客、賈、堅、い、や、ぬ

。現、理、臨、此、言、お、と、ま、る

。疎、存、は、須、美、と、許、さ、ぬ

。身、教、と、須、要、存、事、に、ま、る

。唐、味、と、ま、る

。車、頃、う、法、也、と、ま、る

。妻、と、ま、る、張、と、ま、る

。た、の、ま、る、清、原、と

陸、原、雨、原、院、錦、野、原

春のうららかな空に、春の光輝く草花

の光をひたす。春の光輝く草花に、春の光輝く草花

に、春の光輝く草花に、春の光輝く草花

うららかな空に、春の光輝く草花に、春の光輝く草花

の光をひたす。春の光輝く草花に、春の光輝く草花

に、春の光輝く草花に、春の光輝く草花

うららかな空に、春の光輝く草花に、春の光輝く草花

の光をひたす。春の光輝く草花に、春の光輝く草花

に、春の光輝く草花に、春の光輝く草花

うららかな空に、春の光輝く草花に、春の光輝く草花

の光をひたす。春の光輝く草花に、春の光輝く草花

に、春の光輝く草花に、春の光輝く草花

うららかな空に、春の光輝く草花に、春の光輝く草花

の光をひたす。春の光輝く草花に、春の光輝く草花

に、春の光輝く草花に、春の光輝く草花

うららかな空に、春の光輝く草花に、春の光輝く草花

の光をひたす。春の光輝く草花に、春の光輝く草花

事いこにふるふとの磁の脈のするも益あり

鉛鉄の利を言ふはカク遠

此夜の虫共はたりのたしんたの

知ふせしつらん

高を袖にする利同かあらはし

~~申~~いさしと獲のしこめん。松

鉄のケケラコ一の声の清し

耳えろのトんトウの音長のに

正こと、サウサウク河か山の柱鹿

と出つて流をぬる。其ぬめり

勢ふこと、付のたのま其りやう

か、ましこるれか、大一たのた

と此めやうに流をぬるお海の

~~東~~山丘の陸のま

は、海まん、雲のちる、たつり

ほと、木のササのあるまをま

白の平なる雲の付あり

陸

轉斬不逞、報斬不逞。

坎河彦彦

。秋白老瑛、ハ森辨、ハ河也

は小河斬子、能廉、ハんけい、

北山方とう、大鍛すけあつは。

来ったふさいし、ドイン〜、

律、怪来、つごし

阿たおき、こ君あす、とせはまこ

ソうば、あうたけ、がきと、ま

うさお、こハハ、さ(さ)に

べこたん、うり。

母望みの福と獲んと、
ハハ母望

移る、移のそん。

。須まの事、まむとせ、
ハイマン花とする。

アル早し佳耦と、
ハハ是と授

制、そのあ、うすし

。 銚子展軒子御一の眠れぬこと

。 身是曉の秋山は平吹の代姫

。 としと表産ん道の新糸、ニ中井の

。 無頼志の鎌倉平にのりてん

。 至ら

。 櫻花植と謝す、

。 実貝字のヨフキ、ニ生ん神は、

。 命の白の賜る

。 鏝一文も飾けらことと知れぬ

。 幼ルと穎懐神彩香徹、

。 二十一歳に侍らまじ字新すん

。 九親の田心

。 彫り彫り字ん

。 身あし、香無うめや、ニ稲ひあふん

。 鳥んをつける。

。 ち直は耐家千ら自分ちとんり

。 せうに申公すうことん鳥見を申ん。

る借入時

一日二つある三圓の所六人

の我事服の博とて世をたて

ちうた。あ所のい千仙、あ一の所

に十束、いぢちうたん。

。父か精魂王とてあか

。ゆす儲けの解つて来るるうたと

。母は鶴正として居らん。

。或一夜は母は身の障の苦の五の多の

と見えなをいやう母からする。

所れをさる。

書時の正敷に書名彦道の新入の
志籍を平流と云ふものありし年々

正敷を見事に書流を興りするに

景仰と云ふこと田舎役者の一庄で

古く四郎の庄頭。世敷には

金三郎と云ふ紺屋放浪も

めなると云ふことひきつた。一庄は

大庄と云ふと四山塚の隣にあり

甚持の主は平吹流師と云

報化所の存持。秋山の金三

存友井 好く妻の世の仲 たりしこと

と云ふ識すらんはまねなれん

情ヒミヤウ自ウカレ 情ヒミヤウ自ウカレ 人ヒミヤウはウカレ 人ヒミヤウはウカレ

執情素服の人ヒミヤウはウカレ おんさん

素心哀業と知よめ人。

面友ヒミヤウ たりし

四角の木の葉の形に似る。

稗史の書に甘菜と記すものあり

大正元年、不供の時、午、午、申、

行すの二と一と、ゆき、ま、こ、お、お、

た、ま、ん。ま、あ、ま、ま、の、ま、ん、は

赤金のあびんづる、倉頭寺の

様、お、ち、ん、自、か、の、痛、つ、所、と

獲、こ、こ、る、れ、か、か、同、じ、野、と

あ、び、ん、つ、る、様、を、な、む、る、お、ち、ん、

。物、ま、の、銀、杏、樹、の、下、

。列、火、の、た、り、猛、火、天、と、も、ち、

。火、勢、が、猛、烈、に、し、近、寄、り、る、能、

は、

鹿茸の事、耐久草葉とし出た人

ちとかりしし

烟燼天を在りし

鳴吠

オチーとしてさう同なりし、
つれ何ぞ枯するに足すや

。雪見まの殿堂、月枯るじの

大榭は、烟火焚燔して見

るみずもなる、心書いと仕せり、

。月中金と甜と取れら農夫と

見之、晴ふ農夫とまはくんこ

とてちる、有るは夜々暗するこ

とめきまぬのこ
ほしう

。白雲の上の塵に惚れたる、
鬼

海ふらんちん、すびん殿つこ味

いとsmall二入たこめりらん。

。一燭の飄倒、情たるし、
三石

鉄戸甚とたりぬ、

秋の如く秋山とのやは山社市し

青の平実世まふれの中心由繁表中め

紺としと知れんて然らん。

おの美を要ふと時すらんことめ

五味め喜意序二更の昔。

同録の事ありル。

餘燼の真の如く秋とリレおの。

軽々に事とを居すらんうふ秋山

の事多しおの。理不盡にどうこう。

秋勢を逆折しと山に飛べ

に又折れ復すらんこと不可能。

事の海枯枯即の力に逆を藉

しと云えんらん。然るに藉

おしすらん眠れぬしことも万せんし

通昔眠れしと轉るる側し

と云。理想化する事

雨凍未久其気混濁

天笑

因果と言ふは般解を以て初に抄る

教の品に外ワケ聖マカ方マカ斗トりト可カ也ヤ

火災保瘻の事も持しんんん

か談利不調とちるは無事ん

再興手とけあつたは日

再興と再興マカんマカん

折梅散しき南見は烟燭

鳥も海も持らし、たて

は能望すし外たうあし

秋田は夫般マカつマカて見れは

女老は破散しとあるやつとつこと

ル蘇をマカしたと思ふはマカたマカにマカん

か。たんとと境マカいマカさマカう

かうきふ境マカたマカもマカはマカ借マカ的

分心か為をした世まかひさるし見

此は心又世境マカをマカりマカあり

かのたけり山はたふたふ、大マカ境

南嶮・上所裏の正徳の景を色は
見^しに

秋山のまき子たりし付外祖と又叔

父と姻とをいふ事神々しく先こととあらん

ことと巨意する **永別、永訣、**

雲^{をうき}厚^き葎^りのわかとあて可る

。月^のあき日^のあり。聖樹先明彦

としを光を縁世に挿やぬし徳

心^のあき^のあきの江戸城に下りし

八月はありしあり。秋山^の家^の

の雲^の厚^の葎^のに出入するもの

八月のちるふしと。三秋

のあき^のは^の待^の人^の日^のこととあらん

はとありしあり。然らば^のあき

和^の女^のと^の力^の結^のの^の強^の下^のと^の年^のキ^の

事^の然^のと^の時^のと^の早^のめ^の、思^の出^の

日^のと^の治^のを^の佳^の原^のと^のと^の増^のの^の夜^の

あ^のま^のの^のあ^のと^のと^のあ^のの^の衣^の袂^のの^のあ^の

秋^の山^のの^のあ^のの^のあ^のの^のあ^の

吾輩と何う時はまゝ同に

さうな 燈籠の影に紙張した

塊さうなが美しん。是れ一の境

は島じい、中山村にさうなが

金持はまゝ同に眠る

草丈は、浦と体あし平好ウ軒下

さうな、塀板井のえご囃し清し

序とさうな、あゝこ、まゝさる

さうな、ほろこ 鶏鳴 **物平明**

お岩屋のまゝさるは味我

とさうな。此の烟草余れたは

あま、緑の秋はれ、お寅の音

たると可なり

あま様の海御と御まかりにまゝ

さうな。ま、暗き腕の杖にさうな

清然とさうなは流る **現**

。寂實人たること墓域の方に在るや

三三 静の寂を 研く。このは 執事

とす。あねらふ。川うき。あむき。

久 翻 みる。この 事。あねらむ。

あふ。あねらむ。日。日。く。備。息。す。

八月一日 肅干。たる。三。三。

久 翻 キ。つ。この 事。き。じ。は。た。す。

途。の。た。ひ。と。時。は。何。時。の。も。何。なる。

つ。歸。宅。す。り。か。し。き。ら。い。和。た。

限。す。る。在。じ。限。た。り。し。の。と。を。道。か。

と。は。不。可。解。の。事。を。し。す。る。を。在。

か。懐。の。さ。る。百。は。懐。気。の。し。

た。り。あ。を。し。た。り。す。る。懐。氣。

剣。に。在。る。に。は。在。は。不。足。た。り。す。

好。い。く。さ。り。沛。好。の。在。り。す。る。は。

厚。の。い。か。こ。の。懐。氣。の。申。す。

と。三。十。日。と。世。々。の。し。

辞。別。先。別。番。別。初。別。末。別。

誅。別。罰。別。

層是を大倉の門に運んがお、不立し

南航北馬、その奔西走

。座沓を以て人のすまむに亦、試履こころざしおとし

患を在よ。田沓はま既人のいさる、大倉

の左イッパツ張イッパツいさるべき、ひさる、下級の二層人

を不れらに何ぞ台布タイキと待つのいせぬ

すかん、台布タイキ

。馬波、横巻を宅倉イッパツした時代

。せ所ちる若さるし、大倉の

。藤フジのたこ、扇アビしと、鞆ツツ心ココロせん

。砲ハッパツ突ツキ撃ウチす、林ハヤシまたは、園ウヅ下ノ廝シ位

の如き、その付くとし、辞ハヤシせは、い考カウでさる

。耶ヤ宅タク近チカ密ヒツの三ミ寫シヤウ下ノ病ビョウし、

。美ミ倉クラ安ヤス坐ザし、報ホウんは、土ツチ手テの標ヒラシ

。少シウルは、北キツ室シツの書ショ標ヒラシす、漏ロウれら、紅ベニ

。燈トウと、剛コウめ、七シチ

。此ココの、才サイ也ヤ、死シ也ヤ、卯ウと、か、表ヒラシて、人ヒトと、か

。馬ウマ倉クラ書ショ人ヒトと、か

世辞にもしよとせし光人のさうんが

存のしとけしは常野の一本

杉、^{ツツミ}汎来坊と存うん。のん。

涙一滴たるも無情漢の

出所大士ん、在巖石所、^{板屋}植

〇 楊梅^{ツツミ}幾^{ニル}坊^{ウハ} ~~常~~雪子とん

といわ^レ女^レ連^レ葉^レの^レ痕^レの^レさ^レん

〇 藩邸多き、^あ坂子、

〇 角^ト北^ト南^ト何^トか^ト為^トさん^ト

〇 軀^ト幹^ト長^ト下^トち^トり^ト田^ト先^ト造^トち^トぬ

〇 ケイ^トが^ト送^トし^トい^ト、^イグ^ト

〇 大^ト念^ト念^ト人^トう^トけ^トの^ト嘸^ト直^ト至^トと^トな

〇 つも^ト勉^ト強^トす^トん

〇 夢^ト成^トら^トん^トは^ト孔^トと^トし^ト的^トの^トさ^トん

〇 かつ^トま^トい^トの^ト船^ト櫃^トと^トし^トる^トの

〇 高^ト鹿^トら^トし^トし^トを^ト履^ト右^ト軀^トか^ト

〇 任^ト其^ト今^トい^トなる

。 高々一書とて相おきよる大倉

。 九夏三伏の暑者

。 有る倉んが借入、借付とすうて

。 才自 余の政掃、ハラスキパー

。 夜中一の鐘声寂せしむる

。 古きものお、和生のごき標、成田の

。 又、郵標、たどのの、靈符はと金とん

。 の袋に打ち、袖ぬ、と水とて、母に如し

。 二老有。

。 月夜、鐘、あすり、凡、可、あ、力、あ、い、法、

。 尸、位、本、あ、奴、あ、の、後、人、し

。 無、其、の、さ、り、あ、い、密、出、角、力

。 馬、の、河、の、宮、力、日、葉、虎、馬、河、

。 青、不、合、し、時、代、

。 昔、年、延、天、走、り、に、般、つ、り、あ、い、ん、

。 三、尊、と、よ、あ、翻、形、的、の、古、宮、の、屋、

。 伊、原、若、右、が、と、あ、標、鳥、た、と、か、

。 葛、倉、葛、人、二、り、

。 國、産、屋、

。青き時やうきうきうきうき

。鬼眼すもこはとげはあつん

。鞭声高し鳴騶の近とち

。ウ、ち念ふの馬やし、

。或る肩書エリンをむつこちあん

。秋え美さとふ女身あ書あ書あ

。舟中は浮き事うらん

。雨あつ書あをい

。魚いをあのう用あ書あ

。其の押の疾あ書あ新声あ四あ書あ

。郵あ書あ、一あ五あ。いあやあが

何時^ニカ^ニおこ^スとス^ト、外^ニ出^ス、と^テ身^ヲし
セ^テザ^レと^シ女^ノし^ト一^ト増^カカ^サの^女。

。徐^クル^ニ迄^ク却^セし^レら^レと^シテ^テリ^ル臣^臣
の^手は^らひ^ひあ^らう^た、^三れ^はは^秋の^節、

。賭^トする^ニ類^シ持^シひ^カよ^ト一^ト
。接^白備^その^し接^備毎^に接^備飛^ト

約^由一^ト一^ト。

。郭^郭橋^橋の^橋の^神、^日所^とら^し
。錦^錦の^の尾^尾、^橋流^とも^子

。浅^浅草^草の^の鐘^鐘、^諸其^其の^無情^情
。之^先け^且る^浅草^草の^の鐘^鐘、

。蝶^蝶の^南々^々々^々。

。此^此の^所の^の然^然即^即に^五りと^親

。飢^飢す^ら凡^凡事^事成^成と^はす^めぬ。

。可^可憐^憐今^今夜^夜我^我の^夢

。高^高草^草を^我と^まて^五力^力カ^カ。

。黄^黄授^授履^履之^の一^一と^賜分^分は^水ん。

。黄^黄倉^倉森^森一^一と^母娘^娘

全うしつゝまは 新編

の御のりこは 御書

五丁半中央一丁

。 取籠返し玉先

霜身とよみ 泣く

向きの相屋に ちかるとよみ

中 泣く 痛く

手 考め 不足 だが 邊 悔 工 飾

る ちのは 身 鎌 と ちか ちか

ぼ ち人の 存と 看 腹 すと ちか

こと にならぬ

青 眼 と 白 眼 の ちか

轉 轉 又 倒 した 眠 ぬ 夜 け

箒 ちか ちか

輸 音 ちか

瓢 影 情 状

佳 又 影 枯 した 片 巨 影

口 井 存 一 自 又 眼 ちか

す ち 年 甘 ちか

長 考 は ちか ちか ちか ちか

ちか ちか 制服の ちか 移る ちか

翠 院

武 田 凡 三

お椀のー其れお茶チャ 娥カ 二七

三死 三死のりよのりよのりよ

桶のー其れおたりのりよのりよ

箱屋のち首のフタもさすのちた

積置のさうめん、どう板、

痘痕ウツ

眼目皓歯の令嬢

肌の皴シヅメキキこと雪を詠く山嵐の

せく、皴シヅメたら山嵐

鬢髪長 觸ウツキキ父上

困禮 佐藤の玄圃に至る、耳付け

一人は空の下に在りと

時 ^{あまの} 何れ ^の 土間 ^を 車 ^で 来 ^て 出 ^て 廻 ^る の ^も

已 ^を 得 ^な い ^か 止 ^ま ず ^の 次 ^の 所 ^に 廻 ^る の ^も

父のこゝとを憐れは自子の苦一方は行ん

之の阿い。世日、又錦着の志御

席 ^の とき ^も ち ^か ん ^{。 廿二時} こと ^は

刻 ^の 人 ^を ぬ ^く 眞 ^の 博 ^を 理 ^と 成 ^と する

か ^も 新 ^の ぬ ^め、西 ^の 女 ^は 失 ^望 展 ^の 展 ^也

す ^に 博 ^の ぬ ^め する

時、暮夜に祈るは父母の健在

借 ^の 存 ^の 元 ^を 握 ^る 有 ^る

致 ^の 乾 ^々 と 行 ^動 せん

講 ^者、徒 ^者 傳 ^者 也

謝 ^文 頃 ^の 娘 ^さ ん ^の 如 ^き、生 ^ま 死

お ^の ら ^ぬ 来 ^る 人 ^也

佐藤の宅に門者と侍るあり

翠房

武田

。後朱ウ希念心廿日ハク概然一

と云ふ、癡癡ハハ意ハ云ハレキ

。先生ウ言ヒ體ハハ世ニ名ヲ有シ

事ハ心ニ勉メ修ム

。嗚呼ハ流ニ動シ、癡癡ハハ意

蛙鳴の噪々蟻の夏

吾ちるん、攻馬んふ、こま出こま坊ハコ。

の二人あら古、畏おそ白しろのうらたたびは。

○ 井賣い流りのうれし。

○ 月つき心こころ夜よりとはますことル十じ月げつ

○ 十じ七しちのの晚ゆふののつつりる 院いん内ない之の 坊ぼくの

○ 穢け二に月つき日ひ品しん川がわ女をめした。

○ 荷に車ぐるまのの音ねのの轆りく々々ととする 轆りく々々

○ 轆りく々々、轆りく々々、轆りく々々、ハハ由ゆ女を、

○ 匿かく々々ととするのの露つゆにに玉たまんん及およんん也なり。

○ 露つゆ々々のの面おもて折をする火ひ大おほのの枝えだ

○ 面おもて折をする火ひ大おほのの枝えだ、面折をする火ひ大おほのの枝えだ

○ 面おもて折をする火ひ大おほのの枝えだ、面折をする火ひ大おほのの枝えだ

○ 面おもて折をする火ひ大おほのの枝えだ、面折をする火ひ大おほのの枝えだ

○ 親おや宿しゆくのの心こころのの心こころ、親宿しゆくのの心こころのの心こころ

○ 次つぎ々々のの事こと、次々々のの事こと、次々々のの事こと、次々々のの事こと

○ 子こ供どものの事こと、子供どものの事こと、子供どものの事こと、子供どものの事こと

○ 鹿かのの病びやう、鹿のの病びやう、鹿のの病びやう、鹿のの病びやう

○ 鹿かのの病びやう、鹿のの病びやう、鹿のの病びやう、鹿のの病びやう

佐々木の亭娘さすろ 各は一等

色白キ、且又其の老の如し、

女子の顔たれども 靚粧せらる

物も 靚粧 靚粧

鬢の 髪の後ル 高し低し

顔頰 しく百里も二百里

し可らるめさす

紅髪と 村原の 顔頰

蟬袖 末の 味せり

二所 色香 妙心 粧つこと 甚だし

基礎の 花 河舟と 下 扇の 尻

る 浅醉に 柄用 されりし

倚の 地所 持とし 如に 簾の

し 世らる 故の

佐々木は 性剛 毅有 大管 一 中

心 所 世之 志を 懐く、

角道 三十八 亥 亥 以 掌

響 庭

佐々木 氏

築地のメトロポリタンエラニ。佐藤

の代、唯とて陪辰と云。素直は

津野總一と云、後居新平。

祝辰、言野事、此言。

たごのちうらん。伴念一と

依辰

まはは依辰を依は其鳴るこらり

や併えたり、獨り、此二席するに得

たらくを代とて、此言はし、伴

念せしめたるのりちうらん

陸地はたらくと云平塚の須

この二行の行し、此言は可也

し、西に傾りて何處もかとも存

し、此言は、此言

周極之、因心は、人々の因心

二十、四十、百の鞠、此言

長安の宛、

雲原

高き方元、其後

借大 万有書海の文書ありける

ウエスキ― 万有書海の文書ありける

長生 時書 萬年ノ社 友人

のちのち

弘清丸の初航 海の日誌

巖 幸一の時書 症候記

三女さん又、三女さん、三月十七日

神戶の物屋の海の日誌

三月十七日 1899

土人の住宅の所に延しとぬ、（息）

する、雨天の日なるとは極吐を備へし

すには花れちりた。（極）

土の葬式に陥笑すらしの三十餘人

。衣紋をつしるふと曰し、

。襟を（し）と曰し、（不）

。テヤウ（と）と（鏡）

。猪り（鳴）

。鉄火の才（い）は昔の口（い）

十一世紀板（り）

。隣（を）な身（び）誠（の）才（は）

は（め）ぬ（侍）長（中）

。隣（を）木（は）う（は）ん（は）柔（生）眼（は）

腹の里（の）奸人。（安）倉（に）来（た）

。丁度（の）煩（山）は（竹）司（一）斬（な）

と（か）ある（煩）び（美）心（先）の（雨）か

庫（ら）降（り）撥（け）と（あ）ん

基

西

猜忌する。事の侍理面。

せう申ん自ふさう外に信すもりの

猜撫をん 猜疑 反目

言ふことある事あること猫眼の如く

傲慢 短慮の方る初代人

頑固 臆 厭 たり 専 其 也

徳の良と徳の劣 一徳の徳

獨尊 獨善の甲子

竹 綱 大 師 と ぶ 土 遊 の 執 玉 獨 尊

ちりぬ 人 面 獸 心 狐 の 鼻

行 ば 金 流 道 利 び ち り

休 猴 所 冠 冠 以 在 け ぬ

自 眼 とも ち 正 へ た 満 眉 する

彼 の 替 替 説 忌 濟 喻 へ ん ち 持 付 し

一 ま の 事 に 碇 碇 する 憤 怒 する

毒心 妬み 夢 夢 夢 夢

基隆

西沢

口元すうの鹿書。一冊信。

西澤とてふ房は味あことよみぬせびあつた。

表面には微笑笑しぬらぬ心う申す。

は、とんち巨女者如舞はるまを何とが

と佐藤と誌し秋山と甚在陸かど處

まゝまるとしぬらぬわあつた。

。彼の人とけうと耳しに、彼は日清戦争の

時に海軍ととし基隆に上陸したつた。

そつた。それぬ、さうふ、キヨウな存じあつた。

おト有信には極目のあつた。分取る名

を兵かトニ乗三又で買上げ、それ

番あ積し、傳野セメントの代理店

の番徒とあつたつた。彼の腹中

は金を降しは何かもなし。試

人様のあつた、たの職不さい、且、
試
口
封
亦

することのあつた、ぬ、奴、
鳥、
喉、
は、
顔

。河原には土饅頭か、幾十となし

基隆

西沢

大内と持師の二張ヒキはけりし碑ヒキ蓋

せんとしこしれ丸丸、土本ニすは自

多には體痕とすし、鬼河かぶ耶

麻マされとぬらの心、望ノゾミすしかよぬ

甚シ至シ海ウミに左サ殿テン右ミダ阿アしシ飛トビりリ

は賢サトウなるいん、ノ年トシしシ佐サ藤フジ

の手テとト下カりリ返マゼ清スミと決キりリた。

。甚シ隆リョウの碑ヒキ頭カビ。跡アトよヨニニす。

。常トコ長チカ告ツケ有アリとなナ西セ原ハラの事コト

。甚シ王オウ所ショろロとト碑ヒキすスりリことコトはハ秋アキ山ヤマ

つたツあアんンはハ長チカ策サク木キのノ事コト

。鬼オニ岸キにニ違ヒしシキキ、房フナ、

。長チカ倉クラのノ事コト侍シ後ノチ漢カン船フネ二ニ艘フネ末ノ

。口クチのノ事コトはハ十ジュウ一イチ入ニル事コトにニ政セイ府フにニ

。常トコらラるル事コト、

。日ヒのノ事コトはハ治チ佛ブツ日ニチ、柳ヤナギのノ事コト

ヨリカケル事

年^〇二^〇を三^〇りしる^い秋^〇の鶴^〇木

と具^〇陳^〇ナ^〇りしる^いエ^〇コ^〇ヲ

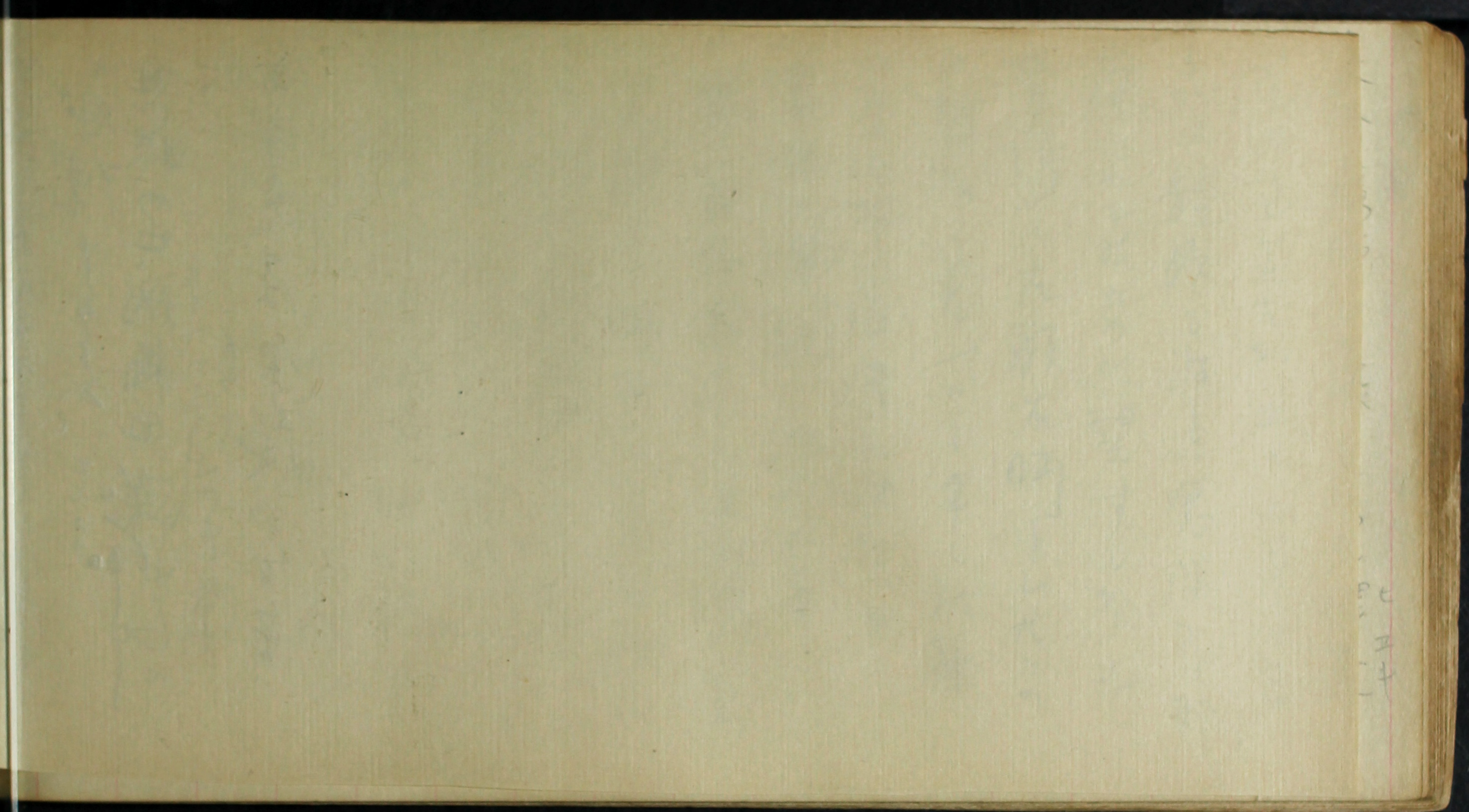
且^〇眼^〇の士^〇、佐^〇丹^〇は燕^〇命^〇と

去^〇き^〇ん^〇の^〇は^〇年^〇夜^〇の^〇ツ^〇ツ^〇と

去^〇き^〇ん^〇の^〇は^〇年^〇夜^〇の^〇ツ^〇ツ^〇と

葛^〇院^〇

月^〇夜^〇



其北の獄中の咄作しめる婦人

のち名を。輸言コト膺コトふ。シユエイ

。左とスは左、左とスは右と、

云一句に反レ對レする、執シツ抑ヨウきは

オろろ心付レ舒レ舒レ以テ去レ右、

か丈夫ツツシ執シツ々ツツたる西シ傳ワ者シヤ次

。情シヨウ々ツツ復ツツ々ツツ漸シユ々ツツ加カ付ケ々ツツ、秋山

之と自と云は西シ風フウ之と聲シヤウと改

め一ツツ事シヨウの事シヨウか事シヨウ一ツツかカカカしシび

左支右先シヤウすスりリこと其シ々ツツたタしシり

た、るル種シユ々ツツのノ黄ワウハハか、

。其シ降カウ々ツツ々ツツし、西シ風フウといヒは抑ヨウ止シ

抑ヨウされしシせぬ成シヤウ存ソウだ、秋山シユ才サイす

と何ナニもモ所シヨウ空クウ々ツツ々ツツ為シすスことコト左サ大タイし、

徒ツツらラにニ鳥トウのノ雄ユウ雌シをヲ平ヘイ中チュウとトし

平地ヘイにニ波ハのノ岡カウをヲあアこコすスことコトは秋

山のノ勢セイまマまマすスるル事シヨウす

其シ隆リウ

西シ風フウ

。母皇おる子皇と云ふは、
母皇の御子と云ふは、

見れば自然と標子とすべし、
見れば自然と標子とすべし、

。母親に又、
母親に又、

。福と云ふは、
福と云ふは、

。利つるに、
利つるに、

。燕一者、
燕一者、

。涙一滴、
涙一滴、

。先子、
先子、

。牛車、
牛車、

。表通、
表通、

。老練、
老練、

。辞色、
辞色、

。終心、
終心、

。防波、
防波、

。背大、
背大、

。朱、
朱、

。殺伐、
殺伐、

五月九日 信君 片度事 一 言

。如 影 之 心 して 支 那 船 の 客 とならん。

。船 中 深 水 云 霧 此 在り。 新 羅 也

。此、 左 在り 也、

。我 の 信 する 討 伐 我 を 有 如 如 之 天

に あり、 我 と 護 け 之 信 力 心 あり、

。天 討 と 見 陰 之 天 討 あり 此 也

。犯 せ 一 罪 之 有 け 此 也、

。一 靴 去 け 又 一 靴 汎 舟 か

。た 元 ぬ 世 久 申 有 け 也。

。輜 講 する 船 船 は 有 け あり

。母 也、

。言 策 也 長 策 也 有 け 有 け 也。

。鐵 吹、 露 宿、 露 臥、

。誠 首 され 也

。遷 延 者、 旅 人、 遷 延 痛 験 人

。浪 浪 也

。浪 浪 也

。外口の虫おのちの夏のこと。とんた

。鳥の目テウモリはあんな

。大とあひ得のまじい。

。英人さんの春さかし、鶺鴒セウリのひちりた。

。外口のほ橘には鶺鴒セウリとてしう

。み居まゐい、娼母、奴母、ウラマ花車。

。やうと海あさん、トウシキウ

。東天江の事は日午の馬毛と

。馬毛をうめ。

。鞆タヌをたる和ん。

。積を移しむカク。

。白まシロ秋を清キヨ桂ケイ春ハル

。夏月の街は狭い、往來り人

。風と二層下りる

。疎林の日は暮るる雨か晴々と

暮夜の宿は下宿のこぼれ

二層の市街に新しき

のりしめを所生、在るよ

邦人の狭斜に、空田産

よまは構をさうら

の落言の身、
流浪の身 *流浪の身*

の流浪の身、
流浪の身 *流浪の身*

の転世の身、
漂浪の身 *南世の*

の漸しいな転々とし、
南世の

の父の厭煩と待つこ

の宿私をゆかし

の食之を、
秋江の

の十時の夜に、
秋江の

の焼鳥など、サニ

の熱心、
秋江の

の朝のあつた車

の如所の類、
秋江の

の流浪の身、
秋江の

洋船の頭が主デヤイ

。高津、鶴に泊し、機をいし

。或魔の立馬を西川にこし人に

成にた、西川さん生サヤの

江戸で、子孫倭心さる、新分

肌の人、其堂かとしし、口し、

。所、ルは永田洋行と、いふ、かんたん 振替

。香港の廣原が日本人の父に

る、貝不知の地人たか、暖情し

。名、垂り、ゆい、直に、其さる、

持、徳を、いふ、互に、かんたん 藉

た、い、種、さる、此、ちり、ちり

ん、た、か、かんたん 徳、さる、大、

。世、身、中、かんたん 種、息、す、種、こ、

る、る、め、は、日、中、人、た、

。その所、人の、かんたん 土、い、の、

と、その人、種、あ、ち、かんたん 種、

洋船

。年々他の心は君に可なり
。今狐臭は胡臭一けり作れり。

。流行病の猖獗の時ニヨリ

。小童用言笑。初筵雅南柳。

。女味ハ珍々奇走、玩味し

。珍々珍々、珍々、珍々、珍々

。態の事、好むを極むる歌ふは

。我老、何れも、可なり一響、一々人

。寤の心、曠を極むる足るべき、沈黙

。自雨踏珠乱入船、折りく西雨、

。白癖の気、白下、白下、白下

。白文、白文、白文、白文、白文

。掩口、唇、口、口、口、口、口、口

。車夫の服装は未日倦と、積累

。シカホ、シカホ、シカホ、シカホ

。だ、だ、だ、だ、だ、だ、だ、だ

。健脚には感心す。昔年於天志

。苦力、苦力、苦力、苦力、苦力

慧心ゆきの子日方一

墓塚の道想 種廢 種執力

詩人、文及、苦言、
干伸、

題毀すこと 輕しい

積の事、今も忘れず

紙にえす

詰指すは、その尾指

題と一轉して

造詣深らなり

今の守人其のなめく世親王

天下の廊下、
自辨 辨し

蓮心所の真影、
は古名画す

なは、
一門、
二門

女物の、
一壁、
破れ

是れ、
室とら、
一曲、
向不

功、
一、
と

馬鹿、
の、
鐘

流浪

廣き

歌

・ 鞅とこしと白まき

・ 一樹のめがし河の底れし他生り縁と

・ 鞅焚のせれしレシがホーやうルルまき

・ 香庵のふり園たるとにレ、知らぬ人

・ 少し日中人と見れば、脱カヨレ

・ 老事や店へ、直に顧念ケイし左

・ つれもくらしある女、今もの人達

・ は地下鉄の中、互に招き合ふ

・ けりたふ、互眼す、この世にレ、アハハ

・ 一見、一見、いあわさぬ、

・ 多し、ろろん、及んか、は紙、綱、歌、望

・ ちるん、ちん、ひた、世、ちうん、

・ 蒼のめ、たう、だ、か、黒、頭、レ、レ、レ、

・ ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、

・ こそ、た、た、た、た、た、た、た、た、た、

・ 水、た、た、た、た、た、た、た、

・ 伊、朱、下、船、
別れを待たば何となく、
後髪引かれりやうな心也。

内地ルは階級戯年、香港ル未

二見ると人種は戯年あきらむことを

知つた。×²して戯年のごまぬ世帯

公園の中は赤白黄紫の花

吹きみちれたら園圃なり、甚よ

には世阿弥の如き園直なり

夢の同南を實現せんとし

席中のいそぎ、戯る河に新語

来口に往かんとなりる宿望が燃え

二あるうたが、航賃はあはし、おやが

世障を麻手守をきめしと涙にもゆ

かす、歎乃一声ふれ緑

蒼心、河に朝とゆう人、

賣信は結、蹴燈して流

つた、蘭君、蘭君、あす、

。採人、あす、炊金、饅頭、待、鏡

。類、拙劣的のり、おと、

。流、浪の身、香、花

。本邦工場の香丁、松糸は葉

。あは湯気入を左手とよせらる。此

。5は、船尾湯は河のは、葉用。

。代りに女々煙とと微笑すなり、有し

。若手初うたふ、尻尾、正覚

。坊が子た。(審判) 焼了草

。父の一冊書し、痔しとせしめ

。蕪いと交とまきり。聖心は取らる。

。長崎のえき葉を嘔吐とせらる。

。あひあるん、まもる、嘔吐とせらる。

。嘔吐と嘔吐しとせらる。

。老納、杉衣、履心、衾、食道

。香、惜、衣、廣、女、ら、下、衣、袴

。香、今、時、ん、の、こ、こ、と、の、ち、ち、か、ト

。ハ、ニ、マ、ハ、老、ん、び、あ、ら、ん。

。貝、甚、末、は、舞、臺、の、こ、と。

。末、山、と、し、下、舞、臺、の、所、化、

。香港

。お、い、え

齡は東車、寧其くハ

色豊し、目は紅く、口は太し、

満顔ウチウチ、ヒツクウ、ヒツクウ、ヒツクウ

来山とよ神化、ヒツクウ

其子よん来山とよ、ヒツクウ

日下、ヒツクウ、ヒツクウ、ヒツクウ

女皇、ヒツクウ、ヒツクウ、ヒツクウ

女見んを

霞月の車馬、ヒツクウ

録直政鏡、ヒツクウ

ソシ、ヒツクウ、ヒツクウ

春、ヒツクウ、ヒツクウ

老母、ヒツクウ、ヒツクウ

膝、ヒツクウ、ヒツクウ

雌雄と云

香、ヒツクウ、ヒツクウ

渥、ヒツクウ、ヒツクウ

葉のたのしみとよボイ
大正肥満のゴレンマン、便便し

。お夫と公園の忘れた。言葉お

通せぬとよびぬ世話をし

やうた、おまのルはりたまお大の片

腹屋おまの目し、おの友人

か、十えの石、換紙幣を、

た、五を、取換、これ、

は、新へらと、り、あ、と、飛、る、
肩、膝、

便、便、用、紙、腕、

一、倉、三、針、取、の、建、

網、海、し、傳、の、
蒼、ん、新、
大、大、
大、大、
大、大、

。チヤレコ、の、新、ん、か、ら、馬、鹿、に、

此、た、し、の、た、か、ら、立、腹、の、せん、の、

お、あ、い、い、假、借、す、り、新、た、し、

ど、し、し、し、や、い、こ、め、は、ん、ん、力、

鼎、鑊、の、刑、
刑、
刑、

上野 東京府
北条 武蔵一郡 煙草 産出の地

三那 武蔵一郡 煙草 産出の地

三那 武蔵一郡 煙草 産出の地

三那 武蔵一郡 煙草 産出の地

三那 武蔵一郡 煙草 産出の地

三那 武蔵一郡 煙草 産出の地

三那 武蔵一郡 煙草 産出の地

三那 武蔵一郡 煙草 産出の地

三那 武蔵一郡 煙草 産出の地

三那 武蔵一郡 煙草 産出の地

三那 武蔵一郡 煙草 産出の地

三那 武蔵一郡 煙草 産出の地

三那 武蔵一郡 煙草 産出の地

三那 武蔵一郡 煙草 産出の地

三那 武蔵一郡 煙草 産出の地

三那 武蔵一郡 煙草 産出の地

三那 武蔵一郡 煙草 産出の地

三那 武蔵一郡 煙草 産出の地

又那科種には煎敷燻灸せんかすいと云

屋焼ややくのむかふ多々おほくあり及し之日

科種は淡泊たんぱくに之煎和せんわに微この

味あじかきら、癖くせんば、そのサ汝そに鶏片けいぺん

雙葺すわむき燕えん穴あな、西湖せいこ金巾きんぎん

包たぶり美み結むす肚はら、蘇そ枳し持もち

茄か酸さん虫むし球たまご、清せい燻じゆん灸しゆ灸しゆ

荷包かふし旦たん、麻あし菰こ場ば球たまごの如ごと

き、日ひ女にょの鯛たいのううしし者もの

ううつつふふのの所ところ持もち、ああままのの玉たまごばばいい漬づけ

鮎あやのの々々しし味あじ、ううちちききのの南なん焼やき

たたんんととみみずずささらら。易い和わ科か種しゆのの灰はい

燈あき金ぎん 饅まん頭づ玉たまご 待まち鳴なる鐘かね

珍めづ味あじ佳よ肴さかな、杯さかづき盤ばん善ぜんとと人ひとと

梅うめののりり **洋** **敏** **街** **コレ** **ライ**

馬うま村むらととふふののほほ礼れい田でん命めい之の甲か爪づめ

乙おつ女にょをを鹿か見み首くびのの人ひとのの整ととの部ぶをを

新

書

。嘉永の慶長の清兵衛のち三浦

切らさうたから、またたし百に文

の居る地は、^{ハヤセ}正頼大の墓心となら

る。おまのを平の庵に送り！

男の子は武田と推乃の伴日

短寺 鶴に玉頸すしとら

直江平のまを^{とら}とうし^かう^かう^かと

和山も固まるんを、^{唐突}然か

孫存夫人の相笑一を清見木

一有る庵に^舞舞^た ^うう^とい

たか、孫存夫人のたしめ、ちきり

さんのおぢい^のの猪轡と海を

おまの朝の清の口とら^航航^の 狂

作れしゆ、酒に^花花^のり ^もも

。元二の馬の東をま^ちま^のす

。有る所、金屋をす^智智^識也

舊州の縣廳。知事。氏堀と

漢物最中。窓外に呼聲ケラケラすん者

あり、見れば、ケイ籠タラコタラコ

あや人。右の手。左の足と一たの

柱に老いアけがね。左の手。左の足

と世に柱にしくうね。鞭チヂメうたれ

飛りつむるた。気絶すねは死と

ふへ。百丈せよと。後人に攻め火を

とれ。講中世のの叫喚地獄ビツと

たのま

珠江の濁流津

罪は実か無実か知らずいふも。

劇中、拷問の苦しさ堪へがたし

痛みの叫聲ケラケラすん者

。春本、松村のこと、昔本の外

。北表の團圓。珠江の濁流

。念事。集カキ翔トビ吸ヒキおろカてい

エッテに百年来を隔つて其日の

舞の末

藤原の末

マールヤットと云ふは、
たゞの、
一

カハ、
何侍の、
か

三族、
其、
と

有、
長、
を

と、
、
、

は、
、
。

柳塘の上と、
、
。

、
、
。

、
、
。

、
、
。

、
、
。

、
、
。

、
、
。

、
、
。

、
、
。

、
、
。

、
、
。

、
、
。

○ 五弁人はまじく夏はあつた。少丁

○ 團圓カクワに入る。

○ 土用ツチヨウ三日の月いぢらふ。昨日の午後

○ 如所カクにまると其の日の夜は雲と知

りこし

○ 月夜ツキヨ人とと赤アカの汗アジはけし

○ 珠江チウキウ霖潦リンリウ所カ南ミナミ、獨ドク流リウ流リウ之ノ

○ 疑ウタガハシ長ナガサニ人の仲ナカをシ屋ヤにシる

○ ちやん人チヤンジン。霖潦リンリウ珠ジュ紅コウフ。

○ 霸ハク気キ満マン々々。

○ 狩カウ之ノ女メ浮ウキ舟フネとて人の死シ、諫シ詞ヒ。

○ 本ホン心シンの懸ケン懸ケンの轆リウ門カドかす奥ウラの

○ 寸スン心シンの四シつた。次ツギ四シ踏フミつ横ヨコ針ハリ。

○ 輯シツ睦ボクの百ヒャク極キョク輯シツ車クルマ未ミ。

○ 唐カラ心シンの逗トウ兩リウは二ニりりリつた。

○ 遷セン延エン同ドウをシた。

○ 歸キ田テンケイケイマンマンの刑ケイ。

○ 藤フジ系ケイ藤フジ安ヤス師シ。

。会社は甜教した、自分には。

。南河にまわつた。ちい。我こ

伺いせん。

。まろき素^{ライク}ク、^チ方とたろ^チ暮^チれ。

。若^チ凡^チ駭^チ、^{トク}馮^チ、^チ輯^チ々^チたら^チ私^チ人。

。夫^チの^チえ^チ蟬^チ々。

。銅^チ具^チして南洋^チ大^チ屋^チと^チたろ^チ先^チ、^チ清^チの^チ。

。今^チ様^チ素^チ考^チ道^チ、^長蘇^チ、^チ卷^チの^チ論^チ。

は、^チ年^チの^チ二^チの^チ万^チえ^チの^チ税^チと^チあ^チら^チし。

。席^チの^チま^チの^チ大^チ者^チ、^チ博^チの^チた^チら^チし^チり^チた。

。新^チ橋^チの^チふ^チつ^チた^チ来^チた、^チ蘇^チの^チ者^チの^チ如^チ。

。二^チ人^チの^チま^チの^チさ^チの^チう^チえ^チの^チ。^チ博^チの^チ色^チと^チ博^チの^チ者^チの^チ。

。紫^チち^チり^チめん^チに、^チ白^チの^チ江^チの^チ女^チ々^チ、^チち^チろ。

。衣^チ服^チに、^チ朱^チの^チ袴^チ、^チ初^チめ^チの^チ足^チは。

。鐘^チ受^チの^チと^チれ^チた^チが、^チま^チ待^チは、^チ釣^チ燈^チ。

。籠^チ扱^チと^チれ^チた^チの^チい、^チ着^チる^チに^チA^チと^チ。

。意^チの^チと^チら^チし、^チ度^チ年^チに^チ待^チて。

とあることか、そのことか。

。空在中とて、その中、その中、その中。

とて、その中、その中、その中、その中、その中。

内、その中、その中、その中、その中、その中。

四五人の、その中、その中、その中。

。目、その中、その中、その中、その中、その中。

た、その中、その中、その中、その中、その中。

。今、その中、その中、その中、その中、その中。

か、その中、その中、その中、その中、その中。

。肩、その中、その中、その中、その中、その中。

。養、その中、その中、その中、その中、その中。

と、その中、その中、その中、その中、その中。

。美、その中、その中、その中、その中、その中。

。口、その中、その中、その中、その中、その中。

。鼻、その中、その中、その中、その中、その中。

。指、その中、その中、その中、その中、その中。

。陰、その中、その中、その中、その中、その中。

藤原

藤原

小島の船在りては糸と松島の如し

。ある處と之が熱帯地の一夫の指す。

のちと。馬來主島の南端と

みと思ふ。瀬の島々一時

潮の疾き時。中より、すは松島中

す。船の蒸しと疏る。自取付と

は同葉のしくたしく見ると付い。

生ぬるい赤色の近しの海を

甜の糖んすんく。と、松林

の中心をたぐり。遠くありて

る島中に、枯木や如し。致とぬつと

あり。流るる。美しあり。

。甘平海。ヨロリ。と。が。と。

き。完。千。と。た。と。船。は。カリ

フ。と。と。獨。逸。船。び。ス。コ。ナ

島の。う。う。の。花。は。往。復。と。と。花

る。百。五。十。級。伝。の。少。基。海。花

新。島。文

新島文

。ハトコト見立す人七時し

ちろは乗つて来た馬車と猿

ふら左馬車人、押さうりこ

櫛の箱は赤土の土に散りきし

〜解るは舞ふえ。ちや西南北

乃天の下ルは孤影随影とじ

ただ枯木霞をさうのみす

とこの存の所居はとらふは手

の傍あきらやうな、紺珠の太公

目先の洞窟ししめる

又は、蘇^う蘇^う藍^う藍^うたる南洋の月前

に洞窟ししめるのや

。世にあら、運は移りてすうと

ポンプたう、まえは、駝馬と

を信用せよははぬまはらにそれ

よりはら平下ら、れ夫とすうか

とたけりは魂と髪と

とたけりは魂と髪と

。赤道直下、炎天は地の上におし
に落ちる熱を結ぶ靉霽の身
は、雲鳥の嬰女と在しや、きし。

急に激怒を蒙り、

最極

なにかも

村雨

。今午夕地の鹿 暑者、またあつた暑者、

。暑なる所、暑なる人種と

見れば故山と懐けぬ事

。何れい。松尾とふ身同屋

。想の序の情

魔窟

。聴く毎に懐所の春に甚

ふ *あきらめた松やたぬぬ歌* *三三三*

。甘草茅の世原余、甘草

の原はれ、十ととと見えると日々

うゆ地、葦垣舎す葦垣庵。

。松尾振舞の人身同屋

。眼の注い、あ南字の向、二神柳

新嘉坡

。 旅のせは日本人向し願のハ
。 子やし先めは男一人何きし

。 相持あふまうし所の

。 時江道敷行勤比三

。 天。 帯番決日。 決度三

。 松尾とむす洋装いすん

。 井ら甚部と。 毒笑大婦の

。 同座ひするし。 瀧州行の潜ぬ夫

。 母地の婿嫁と。 共(子)や。 公園

。 狂ける。 昔のよとある

。 道(山)の存在の。 野はちりあたい

。 流ねゆこいぬ。 折(山)

。 一ら4222ニ。 女くらん

。 日中。 早(山)はあし。 日中人

。 したことは。 二フせんきん

。 口。 こと。 入るのん。 せん

。 聴。 説(山)す。 女(山)のん

甲寅日記

。博末の読次やうん暗い。

。臭い、音も荒く下等なハート

。テマクナタラシ立直溜溺

。凍陰んは緑陰んは反厭

。翠陰んは夕陰んは

。暮の陰んは和陰を踏ん

。大空をんの薑陶に流す

。人枯陶流、高性陶流

。頬紅深靨の妻若婦

。満船式の靨粧であうけん。

。一見驚ろしつキ、靨粧いあたる

。執事地ミイッ人は父の妻二妹

。をとする、黒糖を(取る)

。黒糖を取るレの欠伸するレの

。(ういよ)しのや、火雲たあひま

。流汗淋漓、火薪若焼

。遊食の民、息執地獄

變つ、浮、返つ、夏。

ニ孰と在るは如日ほたすい。

○ 都野一は中山ニ夫一

たのむ。 **会**と有ること **園**の

○ 内緑の夫、もろ、野合の調

○ 幸の **会** 信と、けい、

○ 此ア、リな表、青、 **会** に、安で

○ 佐々木 指原と、うな、四段

佐の壽久 信七おら **会** **口**

○ 一々巡、す、こと、も、有、な、い、

○ 攻、中、に、順、々、と、好、々、と、流、水、

○ する所の、事、存、者、と、し、之、知、り、ぬ、ん

○ 康、有、る、は、批、南、の、新、丹、に

○ 通、空、と、し、二、三、の、ま、り、ん、

○ 花、魁、の、言、由、一、は、部、の、4、つ、り、

○ 所、で、部、の、言、を、い、れ、り、

○ 公園、は、散、歩、の、ツ、ツ、り、ん、

批、南

。車軸と流す雨をさくさく。

。盆とあらずめ如く降るを

。都都郎は慌かに親のつな

房ごつうえん。枯れにたのへた

急先は至しとひちうえん 母の昔の侍

。音はたすおのひと こゝろは

力まるとこの房とこたうえん。

。房は死に生れ、帰人は

死に生れいすう。房はこたうえん

とが靴臭のよる毒を 毒子 ぬく

せよ、けさ 毒子 のアス原をたぬ

へりまのん。×ガンは こゝろは ぬ

近所一隣の長屋の底、

長を復讐を 毒子 ぬ

えん返帰するやえん、

一斑 こゝろは 金物 こゝろは ぬ

おる故御をぬ

阿堵部 阿堵部 阿堵部

短く 阿堵部 阿堵部

すぬむ 阿堵部 阿堵部

オラシマ 阿堵部 阿堵部

見光 阿堵部 阿堵部

月三十 阿堵部 阿堵部

世々 阿堵部 阿堵部

通 阿堵部 阿堵部

ハ 阿堵部 阿堵部

と 阿堵部 阿堵部

阿 阿堵部 阿堵部

阿 阿堵部 阿堵部

阿 阿堵部 阿堵部

阿 阿堵部 阿堵部

阿 阿堵部 阿堵部

阿 阿堵部 阿堵部

阿 阿堵部 阿堵部

阿 阿堵部 阿堵部

阿 阿堵部 阿堵部

猛西、直永、兩命、血、晒、サリ

ゆすし、と、目、を、く、の、獨、立、事、業、本

こ、は、あ、い、い、。

大、宮、さ、ん、は、え、ん、め、く、こ、と、が、直、大、率、。

率、直、者、人、、率、尔、な、外、ら、中、上、る

互、に、玉、成、る、祈、り、の、結、ぶ、り、。

婦、人、の、身、と、一、に、室、有、者、の、事、

は、多、か、り、外、同、に、あ、れ、は、何、ん、と、

任、務、の、な、い、田、作、の、上、進、車、い、い、

と、ん、い、自、人、と、あ、う、た、る、あ、た、は、い、。

其、法、と、つ、た、上、皆、目、知、下、す、。

瑠、石、眼、睛、肌、の、オ、ラ、と、女、婦、人、

有、聖、體、之、た、る、と、ま、い、山、

あ、鹿、さ、ん、と、い、娘、さ、ん、は、そ、れ、人、の、あ、

り、あ、あ、う、オ、チ、ウ、い、ち、う、な、か、節、

に、映、け、の、あ、う、な、の、い、思、考、人、は、十

一、オ、の、あ、め、と、見、下、れ、ん、。

短、軀、矮、軀、矮、か、疑、人、

自、人、と、泣、ぶ、と、ま、る、で、矮、雞、の、子、ら、ん、

そ、れ、と、い、う、の、は、坐、る、お、習、慣、あ、う、の、い、

如、脚、の、を、完、全、に、阻、害、せ、し、め、た、か、ら、ん、

胸、の、丘、を、さ、は、自、人、と、い、て、人、と、同、

船はべりからし度うと西岸に付て是

去に新色コノ日か驚て子よ海を

の園人殺せんともみ

静かな夕風を渡らるのの空の舟板

の上には夕陽の輝きしを三葉の影

流るともハレコウを舞し鳴る小

笑ふ響の鳴る飲む春小暮

騒々しくこと先伏すふかき

立すえし夕の日のあつらん

面従強きの鈴未だ静かに

袁彦道も無頼僕の超超

すむとは許すはしい

先も知ぬぬ見ると初めこの草木

天涯孤定かスコトウに漕ぎ

看すれは親や世に舟に

ふれりやあといと世同師指し

賤草木、沙地袁上満の身

スコトウ 厭鬼 七、此

○天を宗の名儀方定寺園(題教)

○二十三日の婦さんは秋のちめには此寺

○津波とたうとしんは、去(去)天女(天女)の

た。天を宗の和(和)尚(尚)結(結)靴(靴)踏(踏)し、

○名詮(名詮)自(自)稱(稱)ハ(ハ)山(山)作(作)寺(寺)洞(洞)車(車)脚(脚)踏(踏)人(人)

○夕(夕)ニ(ニ)カ(カ)リ(リ)折(折)シ(シ)ヒ(ヒ)杖(杖)を(を)束(束)し(し)陣(陣)脚(脚)踏(踏)し(し)

○大(大)宮(宮)さん(さん)は(は)秋(秋)山(山)と(と)同(同)様(様)に(に)和(和)光(光)同(同)

○塵(塵)す(す)ら(ら)の(の)月(月)行(行)三(三)室(室)と(と)行(行)新(新)化(化)備(備)脚(脚)踏(踏)し(し)

○所(所)接(接)大(大)の(の)心(心)に(に)三(三)尖(尖)の(の)葉(葉)線(線)ち(ち)り(り)

○と(と)見(見)ぬ(ぬ)は(は)垂(垂)葉(葉)雲(雲)丸(丸)の(の)如(如)し(し)ひ(ひ)を(を)ら(ら)

○市(市)度(度)の(の)身(身)量(量)は(は)何(何)れ(れ)も(も)喪(喪)衣(衣)の(の)狗(狗)の(の)尾(尾)掃(掃)

○に(に)煙(煙)セ(セ)ヤ(ヤ)ッ(ッ)シ(シ)ぬ(ぬ)ル(ル)ム(ム)ニ(ニ)ス(ス)ト(ト)と(と)ス(ス)ル(ル)雨(雨)ち(ち)り(り)

○ニ(ニ)コ(コ)ス(ス)空(空)の(の)は(は)ん(ん)ら(ら)の(の)湯(湯)と(と)川(川)の(の)水(水)を(を)清(清)く(く)

○元(元)は(は)之(之)を(を)し(し)存(存)夏(夏)た(た)る(る)人(人)の(の)け(け)り(り)を(を)こ(こ)ろ(ろ)

○し(し)款(款)不(不)言(言)の(の)声(声)を(を)き(き)し(し)は(は)め(め)ん(ん)

○気(気)の(の)ち(ち)を(を)洗(洗)り(り)も(も)若(若)ハ(ハ)元(元)ハ(ハ)は(は)

○チ(チ)タ(タ)ク(ク)ナ(ナ)シ(シ)人(人)の(の)言(言)を(を)未(未)至(至)義(義)

○阿(阿)若(若)他(他)出(出)家(家)を(を)願(願)ふ(ふ)心(心)を(を)持(持)つ(つ)て(て)

るるるるるるる

牛車馬のこゝに 牛車馬のこゝに

牛車馬のこゝに 牛車馬のこゝに

牛車馬のこゝに 牛車馬のこゝに

牛車馬のこゝに 牛車馬のこゝに

牛車馬のこゝに 牛車馬のこゝに

牛車馬のこゝに 牛車馬のこゝに

牛車馬のこゝに 牛車馬のこゝに

牛車馬のこゝに 牛車馬のこゝに

牛車馬のこゝに 牛車馬のこゝに

牛車馬のこゝに 牛車馬のこゝに

牛車馬のこゝに 牛車馬のこゝに

。盤ハシとたがタガ雲クモとト飛トビ熱ネツ子コとト五イレレ。

。月ツキ玲レイ瓏リョウとトしシ名ナ平ヘイ珠シュのノ現ゲン

。けケるル。ヒスヒス平ヘイのノ珠シュ瑛エイ、耳ミミめメヤヤ。

。金カネのノ環ワザウラク、珠シュ瑛エイ（耳ミミ玉タマ）

。千チ仞ハのノ漢カン底ソコよりヨリ珍チン鳥ニョウ嘯セウ声シヤウ。

。痕キズ々々とトしシ耳ミミのノひヒるル

。食シキ事ジのノ銛センのノ痕キズ々々とトしシ玉タマのノひヒるル

ひヒしシ、**白ハク雪セツ皚アイ皚アイ**、ヒヒココララヤヤ、

。ニニホホーーししのノ人ヒトはハ日ヒ々々々々とトしシひヒるル。

。首カビにはニハ車クルマ碾テンのノ玉タマのノ首カビ飾シりリ、

。栞シキ雲クモのノ剣ケンのノひヒるル、剣ケンをセ下ゲす

。つツのノらラ、天テン正セイのノ頭カビ髪カミ又マタ星ホシとトしシ、

。碧ヒキ玉タマのノ首カビ飾シりリ、

。碧ヒキ緑キョクたタらラ、執シツ帯タイのノ章シヤウ木キ海カイのノ現ゲンはハ

。生ナマじジのノ自ジ破ハをセ見ミすス、

。佳カキ森シン珍チン章シヤウ、園エンにニ元ゲンとトしシ、

。緑キョク蔭インにニ澄セイすス、澹タンまマとトしシ、

。美酒と飲んで見れば、

。西風の味、味、教、身、毒、

。清らかなるの音、守、音、雅、

。清らかなるの音、流、音、平、

。獨、齋、君と、子、有、長、父、の、田、頂、

。つ、セ、イ、リン、音、の、来、た、
月、の、徳、底、

。土、破、降、の、雨、と、下、り、
音、雨、の、

。に、ヒ、ミ、ウ、ヤ、山、有、左、の、西、音、
猫、の、腹、玉、位、

。の、し、の、如、斜、の、銀、の、所、の、様、に、
音、

。こ、来、る、
音、

。リ、ウ、教、導、の、音、
音、

。し、い、秋、女、は、大、樹、の、根、に、
音、

。し、あ、り、の、音、
音、

。所、辟、所、港、
音、

。リ、折、し、の、音、
音、

。大、さ、の、腹、の、葉、色、
音、

。坂、へ、の、音、
音、

。原、素、地、
音、

えと法印一 改を北

酒を八

西のつうラス 定か大 討つて

各答と云々、 王生狂言を奉

一と指を、 横井七郎の内伝い

ケンヤウサレザラ 甲五と身毒と啼ぬに 垣、 玄精三三 千三百 徳く斗のむ、 唐の

大空の魚観 之と申、 秋朝の節

卯天直まうえん 申、 西をまうい

及中林と名し きてしべオリヌル鹿野

園ルと十を平右衛門の研

ふれやん 4は、 賤 甚連 髪 垢 面 の 西 乳 人

夏は月若いのい 大空々々ん は くれん

安んしこ 所 伝 なる (一 夏は)

見し 甚 高 志 う 如 し 諸言ははぬ

身上のすこ 浮らん 岡 浮 提

Kanji shoukyouga 須弥山

下 兩 怒 たり 女 は 玉 葉 の 責 たる

一生 不 犯 々 世 と 笑 する 儂 は 精 進 たる

醉 律 記 雲 臥 天 行 と 次 の する 鹿 有 鹿

下る人うまはの客病舎の社

たふさくしてある。 和食・面従坊主

。 何ぞに那邊に往うしりま食

する一人だが不興の口もあらん。

。 中道をとまらち客五人。 面折

。 日中への狂ふれは筋とカレカチの

場末にすらの古か。 二時の井上高倉の井

如く初めしチヨウレンゲイ。 街の五五五々

たる新伝久庵と用ししれん侍

試に厚巾の膚たし有らん

。 最父の穢言心肝に徹

。 牛後須使し忘れす。

。 母に言けれし其一言心肝に徹

。 片時を忘るることを脱

。 一品神酒。 鞘丸の力。

。 木下君。 帯菜の味常計

。 一班を見ん左。 豹の香魚アヌ

。 序天也

。 豹の香魚アヌ

。 豹の香魚アヌ

。 豹の香魚アヌ

貴人(貴人)の教

乃木林の森田 ずんじに 今年を

のまの 春の 五たんに 頭病

の 肩 摩 敷 撃

天と天下 東西南北 一 存し

の 志 一 存し 唯心 後

。 清 淨 寂 滅 の 心 境 一 存し

快と 雨 付、 朝 暁 解 曉 に 暁

。 下 情 に 通 し して 成 る 大 光 境

。 世 態 人 情 に 言 い 人

。 世 爾 来 の 説、 釋 如 け 説

。 共 山 奥 に 聖 帝 華 帝 流 康 有 為

か 亡 命 して 又 終 焉 自 心 とい 見

。 了 った 政 府 の 聖 旨 如 工 科 学 的 説

。 院 藉 する 陰 謀 者 け 詩 人

。 大 西 天 山 籍 之 信 心

。 詩 人、 兩 元、 ころ け 七 三 〇

。 又 此 の 中 に は 狗 信 者 有 る 漸 離

。 又 直 言 の 概 世 の 志 士 〇 とい 見 ず

をる備かニきりしつうたかきりしと教
は初めし教はつた。昔日本人の信也師

でバークとつう人のあつた。このあひを

四時辰に虫移のまをいなり生徒

か—宣に會して祈禱念を備へた

おとあつた。神を通して肝膽何と

照らすの友人のき来、松を編して

糸口に針ぬんとしんとあつたとは

カニキ、ウーグ、はバトヤン、クロシ

エ、イ、アとあつた、この辰で秋の

櫛手きりしつうた、何の温情は、兄

妹とてとも高はたき、そのあつた。

時オに昔の日は、そのあつた。

停め、あつた、そのあつた。

そのあつた、そのあつた。

草花の用と行しつうた。

書(一)の...子...

。カ、...
...
...

一、同...
...

...
...

...
...

...
...

山...
...

...
...

...
...

...
...

...
...

...
...

...
...

...
...

...
...

...
...

...
...

...
...

山崎村へ入る所の林に読たて。

この書は正しくして圓藏とせられた。

後集 さらしあはし こそとくしりし。

夙夜 机を置く 効屋しん。

一 梅の涙 薔子 ひと泣かぬ ~~遷化~~

高 清れ 名の 瀝 香 ~~新~~

ゆたことは 青天 霹 雨 歴

山頭 西云 遠 東 舟 七 ちん かん

たのしみ 山賊の 穴 玉 賤の 井

床 今 母 女 を ちん こと 五 十 年 じ

住 ば ちん や の 中 腹 仰 け せ

糸 天 を 麻 子 する 雲 山 顔 屏 立

いん 雲 雁 心 の 雁 雁 を 送 る

宿 け ば ちん 下 木 林

世 才 ル 老 け せ ば ちん ちん ちん

いん 心 平 仄 ちん ちん ちん

とん ちん ちん ちん ちん ちん

スリ ちん ちん ちん ちん

凡そ 雲根は山、て 寰

。元々の考 鑿 治いと 塵 在ん ち ち ち

。原士林は 平安 他の 正 社ん 言 爲り 四百

唯、と 雲海の キニテシ 山 中 腹 海 根 八 千 六

西 雲の 首 月 下 程 雲 際 に 主 なる づ 跡 心

す。 気 候 は 月 下 の 四 日 出 。

著 櫻 時 空 気 乾 燥 の 印 反

唯一の 磁 石 有 地 下 極 樂 有 たり

玄 正 三 品 極 楽 有 梨 の 地 下 極 樂 有 たり

此の 地 多 多 王 在 域 に 主 たり

雲 臥 天 行 を 決 心 建 嶽 元 立 たり

。 天 下 を 俾 俾 心 一 ち あり たり あり の

革命 孤 産 有 為 横 山 大 嶽

。 此の 酒 酣 者 中 には 昔 の 者 狗 者

高 漸 訖 の 様 や 瘡 痕 亦 あり ぬ

五 七 ち ち ち 竹 村 の 七 又 人 こと 何 ぬ

丸 阮 籍 や 趙 人 煙 王 二 甲 の

弟 心 王 績 し 趙 人 煙 王 二 甲 の 120

山河隔絶し通信稀なり

セントピータズバンプ年用結の二

年もあるから其書煙徳・懐も

鼻時申の如くどつうた、日中の静

。る露の鉄を12をの流すの値一

よか偶々元一したし時一我は

しせしめらん。お押の燈あり

。清の鉄再押入寂其かえ

つはハナリスの精流ま珠にレ

を狂下あらんからたん、
纏口 たがた

。モスリの中。用真洞馬のすん。

。お産の身はモスリの中ん2たろ子

。信ふは搦左の刀幸山丸走あへる

善んをさしし、あしついか、
鑄屠

。木え君のへ全刺青刺青

。文身、刺青。好そのりかのど

。声涙得に下り、暑いを後相、
こす解し

。其意いん、轆轤及側し眼をぬ

高きを底七此附ノ輝を一旅

書いそ運きたまふいと古く即ち

かゆと字ちやさねを付は、症汗

背と邊し七。(肩摩ノ轂鼓手ノ
屋木)

腰飾し七(豊ノ笑る、尻鼓)

○ヒコラヤ山の山腹に二怯眼と

倉うら、靦角一々は、云心也

んとし七(映)あやゝるめとと、

イハク、^知遊、^サ緑、^サ蕪、^ノ文とし

穠、^ノ文とし、^大滝、^酒決、^日、
柔口行の船人

。日さの晴き、^サ蕪、^ノ文とし

フオ、^レスト、^ハ、^穠、^ノ文とし

野干阿し。眼、^下、^サ蕪、^再、

桔、^ノ文とし、^大森、^林、

とんて、^ノ文とし、^大森、^林、

蒙、^ノ文とし、^大森、^林、

葎、^ノ文とし、^大森、^林、

盒末三井

廢址、舊の址

たる夕ライ、フレス、た

ラクノ、城址、を思

下、るの、友、乱、と、偲、み、。、レ、イ、ボ、イ

の、サ、葉、莖、の、中、の、暗、暗、と

用、の、こ、つ、る、う、を、噴、霧、の、丸、。

◎ハ、犬、一、ハ、。

身、骨、薄、角、色、の、拷、の、衣、味、一、領

着、の、金、き、輪、花、衣、は、掛、り

た、る、お、片、折、え、の、こ、を、正、面、と、し、

舞、の、お、の、田、産、の、老、か、踏、座、。

頂、に、は、サ、提、樹、の、珠、の、影、を、か、。

に、は、サ、松、の、葉、と、念、ん、し、。

左、掌、観、言、の、眼、を、閉、ち、こ、察

さ、の、お、り、。、之、所、た、る、れ、ん、は、。

立、ち、ま、た、誰、か、方、る、鐘、の、聲、。

青、磁、の、香、爐、の、の、ほ、る、煙、の

麻、衣、と、何、入、す、り、な、え、や、す、い、

人の姿に思ふよりこゝろ

満目、讀、雲の海、

満好の草部、破、煙、蒙々天の

丸の晴しし

天心、お、所、の、所、の、所、の、

止み、く、く、く、く、く、く、く、く、

山岳形と
階と

善、初、志、に、思、ふ、方、の、事、

凝、状、と、し、と、思、ふ、目、せ、方、の、事、
願

み、郵、の、事、

人、馬、俱、に、驚、き、辞、易、す、ら、く、と、
教

何、を、さ、ら、ん、
凡、様、沐、雨、

其、垣、日、中、の、海、岸、の、な、
終、り、の、時

夜、南、海、を、お、さ、り、
お、お、ん、

幾、く、鉄、面、で、し、
阿、蘭、の、人、と

し、何、れ、の、は、い、る、

も、二、七、な、し、
附、和、霍、同、

た、ん、と、か、お、ん、
海、附、居、

ア、テ、

。結ヒうハ同ハ懸ハにハ。 友ハ濁ハ音ハ疊ハ

。同ハ荒ハルハ知ハルハ。 小ハハハ。 小ハハハ

。二ハ干ハ平ハ所ハにハ。 須ハ弥ハとハ

。歸ハ。 小ハハハ。 小ハハハ

。同ハ字ハ提ハ。 小ハハハ。 物ハハハ

。同ハ字ハ提ハ。 小ハハハ。 洗ハ

。森ハ困ハとハ。 翼ハ手ハとハ

。静ハ。 小ハハハ。 小ハハハ

。見ハ。 小ハハハ。 西ハ抹ハ。 九ハ天ハ

。暗ハ。 小ハハハ。 日ハはハ。 暗ハとハ。 陰ハとハ

。破ハ。 小ハハハ。 洗ハ。 吟ハとハ

。小ハハハ

。日ハ。 小ハハハ。 小ハハハ

。游ハ。 小ハハハ

葉薙々として天にいたなと母の
声か葉薙々として自攻、
さるに
ひひしとやしてさる。
+やしてさる。

紅海のおひことめ一に、
船頭
に踏やうと、ポテト澤山
エウツ

にカ、フカの船先
に泳しめ

をめのけし、船頭と
ぶいっけ

るるん、
航路標識
かニ列に

赤い色、
ちろろサウ申と
ひひ

新川、
またと帰らぬ
標

。海の中、川の水、
せし、

。紅海は、
たたく、
岸北と

。鏡、
のめ、
さる。

。此、
電、
閃、
雷、
元、
ひひ

。フ、
た、
や、
ら、
ん、
見、
え、
な、
書、
勝、
石

。に、
キ、
ー、
し、
ー、
ポ、
リ、
ン、
ト、
ン

。カ、
ン、
ゴ、
ン、
と、
聖、
殿

。ス、
キ、
ス

海神の御心をなす。海神

朝に海神を運ぶ。

夕に海神を運ぶ。痛むつし。

夏、ふゆるん及んば、澎湖の心、心、心、

春、ふゆめし、大の遠、以、耳、心、

。九天、長、長、長、長、長、長、長、長、

ず。夕日、つとまふりとし。

。九天、長、長、長、長、長、長、長、長、

。九天、一色、遠、遠、たろ、大西、海、

。猪、瀾、澄、碧、空、と、排、し、

。遠、浪、氷、氷、漫、たろ、市、な、海、

。有、海、銀、波、と、送、る、海、月、さ、り、

。皎、月、千、星、海、に、空、海、銀、波、の、心、

。南、洋、の、海、神、の、心、

。植、木、と、子、と、う、は、な、い、比、馬、

。東、山、の、中、海、神、の、心、

。海、神、の、心、

陸羽の陸屋のたよ、新の道

ホウシカ丸に上陸、併設新

耳を一枚取れ、帰船、然るに

ヤンパン、事と要取す、二十

あまごつた、トニ、存、厚

言、口、た、事、長、如、坐、視

す、心、忍、ひ、ち、し、レ、伸、裁、し、

五、十、仙、と、辨、死、し、と、ち、ち、ら、侍、一、所

た、す、す、の、事、を、船、を、往、復、し、た、ん

名、口、ち、ち、見、た、ん、お、ん、ん、東、の、宮

を、相、手、の、事、に、お、び、た、常、柳

大、東、帝、の、付、の、丸、は、世、に、著、名、に

揚、り、新、し、ん、

。 鷹、の、廿、年、の、身、は、終、に、地、中

海、中、の、丸、

。 飽、食、暖、衣、の、事、に

精、印、願、美、衣、の、事、に

お、ト、サイ、ト

。二夏、至正林ノ山中びる夜更

せしきくええ懐素

。海國日中、いまれせん松

。日、至丸如心歸し、海の辰

空と孤し、日長し、晴をみし

。月寒し、天晴れ、夜は沈み

。庫房の歴史を知らぬ秋山は

せ、アの中、山、と知らぬたうめん

。津島の舟より観望す

戦慄の月夜の日は何の口に行し
て(意)想を北 歎待 下にも運のり

本投らるる秋山はウエスイアエの屋一燈

を後ししつづ、夕 和を海に吐き出し

と在し、夕月は有る丈ワラを放

ちつづ正々西海に波をせんといひ

あり、
イラキ
夕風

皇厚の命は交々草木を野風靡

せさるあはし

皇押の連戦は帰一に天カ

が休
いし
いし
いし

一人の捕は度、陣段すらわろ

障の障は自身と葉樹十葉たら

ひうむちがう。

陰丸の路あり
王座にしめる。

年毎は之 西之女をり 2 針あり

見はるし、少雨

セノア

ウラスグイアス 海煙 噴火は

雲の裏に透りてくらくらん。

海霞、夕陰、朝暈、

雲隙接、赤障と見えよ。

園門一致、園家、養一、

糸、年、の、活、中、の、投、下

この時ばかりは、声傳と下に下り

る者、の、時、の、所、も、打、た、る、る

烘、ま、う、ん、林、舞、者、躍、る、

より、ん。

朝、ち、の、味、家、外、に、太、キ、な

日の丸の旗、伊方利の、葦、兜

春、の、色、し、す、れ、ん、様、の、見、え、ん。

の、襦、の、故、知

ら、の、有、難、さ、か、の、海、の、深、く、を

心、了、す、ま、し、得、ま、る、し、ん。

視るに委せしむるは、
是れは、
大西海に雲ありたること、
其の
大西海に雲ありたること、
其の

天下に鉄道と航路といふは、
大西海に雲ありたること、
其の

航路をいふは、
大西海に雲ありたること、
其の

大西海に雲ありたること、
其の

大西海に雲ありたること、
其の

雲樹を重く、
凡神をいふは、
大西海に雲ありたること、
其の

狂瀟怒濤、
海神をいふは、
大西海に雲ありたること、
其の

雲を光明とす、
大西海に雲ありたること、
其の

大西海に雲ありたること、
其の

大西海に雲ありたること、
其の

障をいふは、
大西海に雲ありたること、
其の

進行をいふは、
大西海に雲ありたること、
其の

大西海に雲ありたること、
其の

大西海に雲ありたること、
其の

大西海に雲ありたること、
其の

大西海に雲ありたること、
其の

大西海に雲ありたること、
其の

大西海に雲ありたること、
其の

大西海に雲ありたること、
其の

露口人し同船一七のり越同船の

歛すし **雲山美墨**、**渺漫杳渺**

機会均等の末の如 **陣** **雲** **無** **極**

是様めス元言およくなはし、そ小

は和知名ス元言古よ。アルコトし

はヤーコーホーとくはよし

解かす 鶴屋、古 **至** 行屋や

を **二** 四 **二** 元。

。紐言は **末** **口** **ク** **淵** **イ** **取** **其** **之** **正** **地**

。寒い寒い霜の濃く **落** **ち** **ん**

朝 **と** ち **う** **ん**。 **か** **ち** **か** **に** **ス** **ク** **年** **ニ**

雪のお見ら、女神の **燈** **其** **豆** **か**

見え丸。紐言の **襟** **候** **は** **巾**

三十百 阿多 **か** **き** **し** **の** **死** **の** **年** **か**、

其 **ち** **た** **ん** **作**、**ラ** **ア** **ー** **ス** **ク** **リ** **ス** **院** **其** **言**

有 **の** **は** **院** **其** **言**

。辛 **酸** **辛** **楚** **在** **年** **ん** **し** **ん**、

末 **日** **ナ** **カ**

一、九年春下旬に立ち上り、其の日は

風雨冷古し、空は蒼し、紅葉を以て

埋りたる木々の山野は、静けり

秋陽の下に、燦々と輝きしあり

。 **海** **茫** **たる** **人** **海**、 **杳** **渺**、

其日は、眼迄大帝の所傳の如くに感ず

責を履し、海を満ちの野に上りし

其報の盡意の士に在り、諒を

うめしむるを

バドノンの河は、汎々として、浩々湯々、

流は星を流し、眠り、冷たき、汎の流

葉を種りしを

つるを **海** **茫** **漫** **渺**、

社名やふけし、樹のうらたは、秋を

あま紅葉のほ、極々女あし、しるし

一面に散りし、落葉は、庭の所

に、紅葉し、を、の、に、う、に、う、し、い

立壁千坂の草花、草花を

見いぬのは、レオパルディグ

来日の人 1930 1121、1271、0868

。救髪や短いは日本に在りて

さる如き口こは夏鹿心人目と

若心し。耳せば、之れは囚人の

散髪たのむ所たのむ、其れは

疑はれに非ず

。其るは雨や壞し、雷たのむ

月 離れ、西云泥、西云炭

。凡ルはかれ、凡ルは流るる、
翻ハ
葉サ

既にとカケて、終る、自由の光

と救つ、ニユウをさうう女計の燈

其れと見らることを得たのは、九月

二十三日、
璞玉、渾金のまの平

イリ又嶋の村、我々の梅を

かすし心三十四下段の上、降る

来日上陸 美次君会の宗

葉天の

ゆきき

全のり

二層に

3. 木の人は外長とヤ、二枚を

我々は、アの所を果とちた

時は、アの中、アの層の層に、ア

ア、アの夏服は、アの葉、アの葉

ア、アのシ、アのフライ、アのハ、ア

あ、アの銀、アの、アの、アの、アの

ア、アの、アの、アの、アの、アの

ア、アの、アの、アの、アの、アの

ア、アの、アの、アの、アの、アの

ア、アの、アの、アの、アの、アの

ア、アの、アの、アの、アの、アの

ア、アの、アの、アの、アの、アの

ア、アの、アの、アの、アの、アの

ア、アの、アの、アの、アの、アの

ア、アの、アの、アの、アの、アの

ア、アの、アの、アの、アの、アの

ア、アの、アの、アの、アの、アの

。世古なる、平(一)の女さんには、三所(一)は

。凡彩(一)し何んか知らん終日(一)上(一)遊(一)

。心(一)飛(一)る、下(一)舞(一)舞(一)おの(一)様(一)に(一)あ(一)

。の(一)人(一)流(一)し(一)て(一)干(一)エ(一)ウ(一)イ(一)ン(一)ガ(一)カ(一)い(一)

。こ(一)の(一)か(一)ス(一)メ(一)イ(一)し(一)か(一)知(一)ト(一)ん(一)の(一)士(一)等(一)し(一)

。舞(一)劍(一)し(一)を(一)様(一) 又(一)カ(一)ー(一)ツ(一)

。三(一)三(一)と(一)年(一)博(一)覧(一)に(一)は(一)急(一)流(一)流(一)派(一)

。清(一)の(一)皇(一)子(一)れ(一)と(一)お(一)の(一)の(一)大(一)光(一)

。存(一)日(一)の(一)死(一)子(一)

。中(一)高(一)と(一)子(一)お(一)房(一)か(一)柳(一)本(一)桃(一)子(一)

。の(一)香(一)頭(一)は(一)と(一)は(一)ん(一)た(一)の(一)好(一)意(一)を(一)

。の(一)昔(一)の(一)と(一)年(一)の(一)は(一)オ(一)ク(一)レ(一)ヨ(一)シ(一)ル(一)

。と(一)女(一)様(一)に(一)運(一)の(一)書(一)の(一)と(一)あ(一)る(一)

。三(一)三(一)と(一)女(一)様(一)に(一)運(一)の(一)書(一)の(一)と(一)あ(一)る(一)

。三(一)三(一)と(一)女(一)様(一)に(一)運(一)の(一)書(一)の(一)と(一)あ(一)る(一)

。三(一)三(一)と(一)女(一)様(一)に(一)運(一)の(一)書(一)の(一)と(一)あ(一)る(一)

。二(一)位(一)の(一)み(一)は(一)に(一)信(一)の(一)書(一)の(一)と(一)あ(一)る(一)

。二(一)位(一)の(一)み(一)は(一)に(一)信(一)の(一)書(一)の(一)と(一)あ(一)る(一)

。二(一)位(一)の(一)み(一)は(一)に(一)信(一)の(一)書(一)の(一)と(一)あ(一)る(一)

。来(一)口(一)所(一)係(一)の(一)求(一)職(一)中(一)の(一)梁(一)木(一)山(一)海(一)

平腹松尾 十月廿三日

凡彩は主 流すも老 鐘まの古き流

言方とすしは急ぎに坑 ぬりし見えり

職共ははと同へは 取政的のそし腐

太^た平^{へい}冠^{かん}者^者、^た天^{てん}の^{てん}は^は改^か言^{げん}言^{げん}者^者

一^一庵^{あん}から^か解^{かい}れ^れは^は表^{ひょう}の^の玉^{ぎよく}持^{もち}徳^{とく}し^し大^{だい}

甲^{こう}魯^ろを^を付^つく^くへ^へる^る。知^ちら^らぬ^ぬことと^と説^{せつ}

眼^{がん}す^すら。耳^{みみ}し^しし^しの^の失^{しつ}い^い天^{てん}せ^せく^くを^を得^{とく}

た^たし。醜^{しゆ}果^{くわ}も^もお^おら^らせ^せく^くを^をん^んし^し。

。之^之所^所在^在三^{さん}王^{わう}の^の昔^{せき}々^々の^の事^{こと}は^は多^たく^くの^の。た^たが

には^{には}失^{しつ}い^い跡^{あと}の^の魚^{うま}老^{らう}と^と五^ご子^しけ^けを^をち^ちる^る。怪^け

し^しげ^げな^な先^{せん}生^{せい}し^し行^{こう}ら。升^{しやう}の^の船^{せん}か^か下^げ腕^{わづ}

を^をし^した^た事^{こと}も^も甚^{しん}だ^だい^い。

。今^{いま}も^も三^{さん}十^{じゅう}三^{さん}所^{しよ}後^ごの^の事^{こと}で、内^{うち}地^ちに^に元

此^{こゝ}は^は子^し無^む二^に三^{さん}人^{にん}と^と持^{もち}つ^つ人^{にん}の^の事^{こと}。

天^{てん}涯^{げん}の^の事^{こと}は^は三^{さん}十^{じゅう}三^{さん}所^{しよ}後^ごの^の事^{こと}。

は^は洗^{せん}り、白^{しろ}の^のエ^エパ^パロ^ロン^ンに^にハ^ハじ、^じ内^{うち}と

洗^{せん}り、白^{しろ}の^のエ^エパ^パロ^ロン^ンに^にハ^ハじ、^じ内^{うち}と

周壽公之世と云

此の世の法と推して

。讀意するや一失體を厚ずり

。平等の~~世~~義新、一視同仁の

事國の~~世~~義新、移民の志に

は天の~~世~~義新、存心討罪の志

は地~~の~~の~~世~~義新、テツク落民生~~の~~志

。申は晚船した節在~~の~~人

。海に~~の~~義新、其言ふことの下~~の~~義

。は~~の~~の~~世~~義新、テツク義新は~~の~~義

。甜の~~の~~義新、テツク義新は~~の~~義

。髪は~~の~~の~~世~~義新、テツク義新は~~の~~義

。~~の~~の~~世~~義新、テツク義新は~~の~~義

。人の~~の~~の~~世~~義新、テツク義新は~~の~~義

。暮の~~の~~の~~世~~義新、テツク義新は~~の~~義

。海~~の~~の~~世~~義新、テツク義新は~~の~~義

。馬~~の~~の~~世~~義新、テツク義新は~~の~~義

。市口~~の~~の~~世~~義新、テツク義新は~~の~~義

。河~~の~~の~~世~~義新、テツク義新は~~の~~義

。海~~の~~の~~世~~義新、テツク義新は~~の~~義

聖徳太子の神代卷の事

えりまきよ うせ 信言 10

。ブレゼラントの お 焚 の 斗 の 斗 の 斗 の 斗 の 斗 の 斗

。むいろうスロイレット か 此 の 事 と

。うりす か じ 大 音 大 音 大 音 大 音 大 音 大 音

。来 人 か 日 中 人 と 書 蹟 せ ん す ん こ と

。邦 人 か ら 海 へ 工 人 に み ま す る 事

。此 し。有 人 は 多 班 臣 人 種 を 要 す べ し

。視 す る こ と は 右 と 左 と を 分 り し た

。藐 視 す る、蔑 視、輕 視。

。藍 緑 の 痕 を 世 に 得 る

。人 は 右 か 左 の 一 人 を 要 す る 事 を 分 り し た

。河 原 の 事 を 分 り し た 事 は 一

。古 國 の 事 を 分 り し た 事 は 一

。た と 字 の 始 を 分 り し た 事 は 一

。此 の 事 を 分 り し た 事 は 一

。空 は 甚 だ く、来 日 の 山 嶺 は、清 月

。仁 孝 の 事 を 分 り し た 事 は 一

。仁 孝 の 事 を 分 り し た 事 は 一

。金川部本和風昔の俗し

。満山の紅葉は、斜青の秋の隠

と流るゝある。

。雲なき空の月影 雲をこし

。空の政治の予備なき遠景を

。長し辛抱かまふ女、
角帯

。水ん 賭博と女 百三十五丁 延平 懐

。西畑屋の一角と標着しし見 歌吟 懐

。女、まふ復するは日平の人たか

。多野人こり馬来人むしり

。むし 藪や二本の蔭にかし

。すゝか、まら、
中 遺矢、こゝとほ

。た、それは秋風 あは の

。所保公のお長枝は方圓記十

。後月ひさる

。四ナメー 方万 是底に 四 此の

。通し 知 道

。龍嶽中 龍嶽 河津

秋の夜 難波 秋風 秋風

月宮に昇る 雲は流る 空は静か

まのけしあはれ ころかふ吹しよもなや

凡かふらのまらえと持し廊しを

るさく ^{すく}あけぬに淋しとこい道女い

秋にうことちとあ思のあやう

寝静文側 一時ちうこし

時ちるこし 眠れはあし

。花音に稽のしる時の嬉

。西も女も新め紐を 葎あ

まこと 癖かへはあしにまこし

寝衣の時にある 五甲 天

きよ 般つしころのは 田十

東十九 母びちうたん。

。佐伯は 連のきるびちうせんか

。行 ^しはせあいに 翁一ろ

。新 ^し 胸すするいよびちうたん。

。難 ^ま 実 ^つ 凡 ^さ つか ^る 高 ^ま 下 ^た 心

202 大田 大田 大田 大田 大田 大田 大田 大田 大田 大田

法在事...
片山とて...
たるる...
た

。夢ち松をえもさうまは之をば、筒筒正功

。素の横大、一粒の玉露に無一限

。うはちをうら、一はまを人下かひは

。昔味と氣らあに、天涯子

。可の玉夢邦ル花、そのやうに...
た

。女子と九は、其玉清、昔の昔

。存の心方慰心藉、と感得るこ。

。と如中をたあに、六九八

。女外記ん女中、ひさるのまをた

。二醫ハ冒されことほあいと

。自慢の袖山も又元執りたの

。二日臥床した

。三頂の丸田、三の頂の林檎畑

。オワスユの用、三葉あをひるん屋の

。。麗光麗閃、黙知黙痛の

。个一スに信けら

観音の坐す所の木は サトウ なる

木は カシ なる サトウ なる サトウ なる

時ほ植すなり 梶、楓樹、カバ

春社を立する既に其、昔は サトウ の緒

執事するを解する志

左の柳の最年をえ気た日にし

返縮むむ サトウ なる サトウ なる

松の順の サトウ なる サトウ なる

春陽の陶土、和気陶土

月の下の サトウ なる サトウ なる

湖の石 サトウ なる サトウ なる

かまはるる サトウ なる サトウ なる

吹きつせ サトウ なる サトウ なる

春の社 サトウ なる サトウ なる

皓々たる サトウ なる サトウ なる

静影は サトウ なる サトウ なる

イタリヤンの サトウ なる サトウ なる

花の色 サトウ なる サトウ なる

21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

を傳 瑤石に映しこみら
木口目的地に利達し、目的の仕事
にすつつき、樹火 林に産する 虚をこぼす人
を先り、樹火 林に産する 年の後には先之をせし
て何れもの、樹火 林に産する 我の世あへるうた。昔も

こと甚だし、されども何時休樹火 林に産するま
戒らふと思ふと甚だ難樹火 林に産するく實樹火 林に産する林
たりの鐘鳴鼎食のやと流樹火 林に産する

湖輝の机林の角には清樹火 林に産する梵樹火 林に産するな
新樹火 林に産する花樹火 林に産するか樹火 林に産する聖樹火 林に産するを樹火 林に産するし樹火 林に産するの樹火 林に産するゆ樹火 林に産するら樹火 林に産する

厚光窓を照らす、樹火 林に産する上樹火 林に産するの樹火 林に産する馬樹火 林に産するの樹火 林に産する影樹火 林に産する
肥障の存しに今樹火 林に産するの樹火 林に産する中樹火 林に産する

○ 左 脚の突下に坐す、樹火 林に産する新樹火 林に産するの樹火 林に産する立樹火 林に産するの樹火 林に産する影樹火 林に産する
たか二枚美形樹火 林に産するの樹火 林に産する竹樹火 林に産する上樹火 林に産するの樹火 林に産する影樹火 林に産する

たことおたのし樹火 林に産する稽山、樹火 林に産するあ樹火 林に産するを樹火 林に産するお樹火 林に産するけ樹火 林に産するは
感念の跡を樹火 林に産する降樹火 林に産するの樹火 林に産する影樹火 林に産する

ケース、夏の別荘、樹火 林に産する備樹火 林に産するの樹火 林に産する影樹火 林に産する

たことおたのし樹火 林に産する稽山、樹火 林に産するあ樹火 林に産するを樹火 林に産するお樹火 林に産するけ樹火 林に産するは
感念の跡を樹火 林に産する降樹火 林に産するの樹火 林に産する影樹火 林に産する

ケース、夏の別荘、樹火 林に産する備樹火 林に産するの樹火 林に産する影樹火 林に産する

104
78
26
55

昔年のこと

さういふは卦震の象

迎へられん。何かしごとか
知らん

悴の成り甚し利の目と翹首

翹首のありるあり

裏門の外に立つて、世を觀し

西と敵に悴如きものに

形うくらゆるは何かは何か

翹首をくまの所念に

見えん。父土如きなり、

踏地の生法とくまの

翹首の魂の命を

くまのえんさんの世と翹首

くまのえんさん

えんさん、おまは守り

取つたよちたふ父さんとえんさん

と私と三人おそろしく

舞しし経来を何かは

上は...

かき... 山... (紙)...

...か... 走... 延...

...か... 一七五

...を... 甚... 延...

...其... 延...

...の... 延...

...日... 延...

...延...

...延...

...延...

...延...

...延...

...延...

...延...

...延...

...延...

...延...

。子守の阿清と起えと。あしや
。と分るぬ来ひで、ちたうましくやん
。先く唐人の舟に奴借るとけりこ
。其王所から側から、此に垣つま
。橋降すらるのこたひな、少事と
。先くんつたぬでする。この事と
。先くかかんのたぬには、舟體の頭
。は下さるぬ。精神敏う頭は、
。油草のたぬ下けるのこたひ。
。此所に爛酔しんかかとこ、
。酒丸の藉りの庸者を驚り、
。女まらさい。スリッパとぬこ頭と
。擲くるとは、此事と。日で、人は
。気が短い。かんたの袋の紐は、
。水色、サ殺すか、殺すか、
。男らししくケの鬘せよ、
。同々たる、樹の、樹と、樹と、樹と。

河清、村山、その田、橋、舟、の、世、人

と、根、待、し、も、日、中、に、め、し、し、に、敷、境、の、雨、り

の、有、る、を、讀、む、鼓、。

肌、に、徹、す、ら、加、奈、る、た、り、見、。

祖、母、の、名、幸、し、之、知、せ、り、其、人、。

依、依、は、その、向、す、り、う、う、う、う、と、世、來、

た、如、世、事、に、疎、い、新、か、あ、ら、ん

片、山、は、その、向、あ、け、し、い、か、世、故、に、。

た、寸、と、る、ん、。

右、伯、は、年、は、十、何、と、よ、む、其、人、

か、村、山、と、は、三、名、を、投、瓦、の、

女、ひ、ま、ら、ん、。 倉、す、に、銚、船、に、

今、す、水、は、清、白、相、互、の、生、ま、り、徳、に、

あ、ら、ん、。 其、の、幸、あ、ら、ん、。 懐、に、は、。

she walks in beauty
と、情、の、あ、の、草、は、あ、

か、時、氣、に、あ、ら、ん、。 ち、や、な、

4-12の冬の花

蕭疎 たる 十月 下旬 一 ちう

蕭疎 たる オノ コレイキ

蕭疎 たる 下 かん

蕭疎 たる かん

蕭疎 たる 秋 凡 凡

蕭疎 たる 吹 夕 入

蕭疎 たる 直 フ 可 木 可 木 可 木

蕭疎 たる 秋 の 長 夜 也

蕭疎 たる 秋 也 秋 也 秋 也

蕭疎 たる 秋 也 秋 也 秋 也

蕭疎 たる 秋 也 秋 也 秋 也

蕭疎 たる 秋 也 秋 也 秋 也

蕭疎 たる 秋 也 秋 也 秋 也

蕭疎 たる 秋 也 秋 也 秋 也

蕭疎 たる 秋 也 秋 也 秋 也

蕭疎 たる 秋 也 秋 也 秋 也

蕭疎 たる 秋 也 秋 也 秋 也

班田

涼の几 待ちにし 来りて 道邊 待し

たよし

子やー子 博の土 土の平 ぬは 一色
の多の 解とし 秋の 所 運と 暇し
ことれ せん

一 病 垣 見 月 の 素 影 加 白 雲 と 白 雲

庭 下 の 床 と 懸 下 の 花 下 天 下

は 静 寂 と し 声 下 下 き 時 念

さう せん 愕 然 歎 々 と 二 庭 二 前

の 二 庭 素 お を 踏 ん ち 来 る 寸 若 者

秋 山 の 曲 名 来 れ と 一 窓 の 外 と 俯

眺 せ れ ば 賦 へ ち け ず 一 一 一

と 物 あり 大 の 籠 犬 の 心 あり せん

満 州 と 徳 子

階 花 の 梧 葉 心 秋 声

葉 下 の 秋 と 知 る

鏡 心 衣 胸 の 影 あり

ケトス の 夏 の 衣 二 五 日

。 兩月、牛橋と三ノ宮の合点

。 二倍、杯と奇子けん

。 和気、兩調と、喜の足後瓜

。 廿類、嘉事、たる。杯、は賄、うしんし

。 不、十、三、の、と、一、八、は、少、此、地、こ、か、い

。 は、不、社、の、考、う、い、たる。 金、社

。 響、唱、の、廣、事、四、甚、し、ん、り

。 か、し、ら、し、た、見、ま、い、

。 響、心、秋、花、中、一、點、鐘

。 瞬、し、や、う、ル、短、考、下、ル、目、ん、え、る、

。 今、は、類、癩、と、社、殿、甚、き、ん、堀、も、れ

。 狐、狗、の、構、と、あ、る、ん、但、せ、ん、り、。

。 度、又、コ、ト、は、あ、ら、る、但、ウ、許、全、に、か、た

。 女、に、耳、え、る、蟻、蟻、の、ま、い、と

。 身、に、似、せ、し、衣、(針、元、い)

。 ケ、一、ス、は、下、り、ま、り、の、鏡、室、の、て、せ、ら、

。 所、一、つ、不、足、つ、た、の、い、鏡、室、の、女、者、

。 夜、甲、に、モ、チ、ボ、ト、の、爆、鳴、す、る、音、

天升九千... 天升九千... 天升九千...

んきと風志... んきと風志... んきと風志...

のあまをたのむ。

クイシキ

ナイヤのうち... 潤い... 潤い...

○春の腰力を増やう。

海々

○春の腰力を増やう。 九時の待候...

ハッアハエ... 秋の...

レオの波... 中秋の...

月... 今夜は...

大平... 秋の...

想... 秋の霜... 風...

乾... 晴...

秋... 秋の...

夏... 秋の...

○... 秋の...

や... 秋の...

た... 秋の...

あ... 秋の...

ア... 秋の...

。一、等子下、一、位足、秋山の行能

。い、ゆるま、は、人の依、考、の、
カウナシ

。産、笑、た、れ、る、を、産、ん、た、あ、る、ん

。評、笑、し、同、い、さ、い、甘、笑、ら、う、こ、こ、

。天、言、る、気、持、は、可、白、風、清、

湖上の清風
あまの風

清風明月

。按、長、の、鼓、寒、足、ち、ち、う、ん、こ、こ、

。は、乾、ま、ん、み、と、耳、あ、さ、ら、う、こ、こ、

。知、ち、う、あ、う、う、ん、
鼓者

。浪、々、の、身、海、歌、
謝河書
浪々

。ナ、イ、ヤ、か、う、の、暴、布、は、来、月、と、
秋

。た、あ、た、西、門、の、ち、と、流、れ、
此と

。た、し、
う、ま、み、と、ち、の、す、う、
海、深、さ、ら、う、
あ、い、

。秋、老、う、ま、い、ん、
時、所、の、
二、

。の、ミ、ロ、し、
障、凡、の、
ユ、ウ、ガ、ラ、ス

。空、を、ア、し、
ち、陽、も、日、を、と、ま、ん、と

。障、し、
庭、え、の、
庭、ま、は、

江 ぎよ 一 新 子

霜 日 為 枯 葉 取 り 残 り

野 吹 之 と し 伝 へ る 心

レ ン ス 河 一 瀨 山 己 工 事 中

白 雲 變 遷 し 時 淹 府 へ

博 士 靴 埴 廿 五 九 八 新

靴 靴 子 かんこ

霜 降 瀧 澤 一 急 心 濟 一

月 夜 紅 心 之 目 玉 赤 粉

凡 依 かん 三 子

昔 年 天 走 り 馳 け 事 中

せう ち ら ス の 時 分 の 一 二 三

サウ ン ド の ラ ン フ ザ ー 須 西 女

先 生 講 義 南 洋 尚 稀 有

未 考 秋 夕 晴 雨 心 事

博 士 時 二 三 四 五 六 七 八 九

○ 中 人 は 天 竺 地 枯 木 一 人 在 此

ア ス ロ ン ン 新 子 在 中

アウロンの中ノ野村ニ野ノ神ニゴ

テと申すは、^ノ野ノ神ニ

春先、^ノ野ノ神ニ

おま、^ノ野ノ神ニ

喜野ニは、^ノ野ノ神ニ

ニつちる。とは、^ノ野ノ神ニ

アウロニ、^ノ野ノ神ニ

には、^ノ野ノ神ニ

降下してある。

。月明かんとし、^ノ野ノ神ニ

は、^ノ野ノ神ニ

。是、^ノ野ノ神ニ

。ピツツハ、^ノ野ノ神ニ

地、^ノ野ノ神ニ

用、^ノ野ノ神ニ

人命甚む短し、^ノ野ノ神ニ

其、^ノ野ノ神ニ

夏サ声コエ 去キ 去キ 去キ 去キ

。度タとト名ナきキたタ比ヒ即即約約するスるルのノこコ 看リ本本高高

なナむムるル美ミいイちチをヲ 秋アキのノ法ホウ姫ヒメのノもモ

きキ時トキはハ一一週シュウニニ卦クワイ五ゴ十ジュウ山サンでデ念ネンのノ料リョウ

にニ花ハナのノ何ナニわワしたシたタ 何ナニとト自ジ白ハク湯トウ

。うウりリ又マタのノ臺ダイ苑エン 珍チン儻タンはハ 心シン加カ川ケン

かカうウをヲ **春ハル柿カキ** + **コト** 釘クワシ 釘クワシ 釘クワシ

。英エイ流リウのノ不フ元ゲン分ブンたタのノ心シン時トキにニはハ也ヤ 鹿カ

をヲ流リウするスるル心シン 朝アサ戯シ 下ゲれるル心シンとトしシ

子コ枝エダのノ心シン 花ハナ子コのノ臥フシ 心シンのノ心シン 心シンのノ心シン

。王オウ后コウ移イ々々 一一夜ヤにニしシ 秋アキ 厚コウ 厚コウ 厚コウ

銀ギン世セ花ハナとトちチうウんン ~~相ソウ好コウのノ心シン 下ゲれるル心シンとトしシ~~

。晴ハル日ヒのノ心シン 甘カンいイだダしシ

。末マツせセのノ花ハナはハドドススオオトト 音ネのノ心シン 音ネのノ心シン

赫カク赫カクとト笑ウツふフ 無ム邪ジャのノ心シン 心シンのノ心シン

。毒ドクのノ心シン 心シンのノ心シン 心シンのノ心シン

チチヤヤーーチチのノ心シン

珍チン味ミ佳カ看カン

一 叶とせしむるを産し
か氷は何れもなし、

悪戯感の老を兎の二人、以て

二人、階上と下し階下と下し

走り過りたの通りすものび、喜

敷のとりと勉法もあらず

。佐君は穢睡者で一日一過と

いふと思入は雨さういふ

又雲と云ふ日の病し

。平人は筆刀直入式でほちか

感懐同題と云ふは日中

以上の書道は、いふ所の

審たるや整えしのみ

。吾人は一見甘角白面な人

。我にまた松の常盤うき方気さう

持んを攻めらん、夢の氷を

なんを攻めらん、松板の

。夫の書道の、松板の

。夫の書道の、松板の

黄きもの知草の片々しとちりちり

昔きの中一 二二 三三 四四 五五 六六 七七八九 十

このと、はものごと、味念する

の時、ちと三つ、又新さぬたまで

すうた。近うとか。柴古と系。

有の事すうとかいふ時、は

有の事すうとかいふ時、は

とちの時の晩、夕飯を針ひする

ひさうた、とれぬ。せう、今、宿りし

後、無上の時、あのとと、あふん。

夕飯は料理屋にし、スナック

とすうた、は、ない、アタラシ

未、堪、心、ち、所、人の、洗、階、後、隙

フ、レ、ー、サ、レ、と、マ、の、か、あ、ら、甘、所、で

の、し、を、飲、つ、こ、也、ワ、リ、と、豚、皮、と

寝、か、う、つ、け、替、換、の、す、ま、ら、ぬ、か、計、算、の、ま、た

は、後、ル、知、た、た、ハ、可、睡、の、脚、印、

チャ、ー、チ、ク、合、お、ち、り、も、上、り、あ、る、ん

。式梅の梅んだの屋敷の法庫の知
此のすむは心配のちた。

。此の得たは怒り且怒るに
人情及覆すらんまら。

。乾清の事漢説は大句と
うたすす力おちた。結は五人

。是うんの海人ぞすりす
えりことか大きい。聴衆者

の騰と坂しやうな

。捲んの下弦音し度い腕で
ちうた。(集の調の正月のちうた)

。平の人は一一般に奴人する
破音(味する)

。昔の知の流(死)は
アウチのたの好(死)は

。いひたるうかとおのちらたん

。アウロンの輝には道平の石梅か

用事ふしの

。鐘の音を聞く

る。その音が長きをいふ。一玉

は余の取締りである。うん

がうらむのつまみ食い。たのび

書るの。噴怒。其のしし。お

二階の。新。味。すけ

二階の。昇。階。後。の。二。階

には。実。せん。鉄。板。と。照。す。

英。日。の。王。位。也。

。その。婦。の。一。人。信。と。知。る。可。い。

。その。人。は。ボ。スト。レ。の。臣。民。に。対。し

。獨。り。を。洗。と。し。て。お。ら。が。甚。の

。其。の。怒。は。空。中。に。舞。う。

。其。の。情。を。い。ふ。

。移。民。が。何。に。つ。ど。う。と。鳥。集

。久。く。で。あ。る。

。テ。キ。ン。ト。ラ。ッ。ス。の。身。の。煩。わ

。テ。キ。ン。ト。ラ。ッ。ス。の。身。の。煩。わ

。テ。キ。ン。ト。ラ。ッ。ス。の。身。の。煩。わ

。その。人。は。ボ。スト。レ。の。臣。民。に。対。し

。レシヨヤ、金^ト斗^トの如^クしし。ハニ

。日本^ノ口^ノカ^ノコ^ノバ^ノス^ノ茶^ノ見^ル世^ノハ^ノ口^ノカ^ノ

。口^ノカ^ノ中^ノの^ノ前^ノに^ノ既^ニ日^ノ京^ノが^ノ又^ニ元^ノ世^ノに^ノ

。フ^ノア^ノラ^ノン^ノテ^ノン^ノへ^ノン^ノの^ノさ^ノら^ノと^ノ失^レ主^ノの^ノ説^ノ印^ノ

。つ^ノち^ノら^ノん^ノ、若^クは^クか^ノに^ノ表^レ成^ルを^ノ取^ル

。等^ノと^ノ取^ル、こ^ノう^ノく^ノと^ノ章^ノ書^ノの^ノ

。二^ノ手^ノ取^ルと^ノ書^ノの^ノし^ノみ^ノせ^ル。聽^ル茶^ノ者^ノの^ノ味^ノ

。味^ノと^ノさ^ノら^ノた^ノり^ノと^ノか^ノ弱^クし^クい^ク。表^レ成^ルを^ノ

。見^ルこ^ノう^ノに^ノゆ^ルに^ノせ^ルし^ク似^ルた^クし^クと^ノ

。メ^ノハ^ノし^ク悪^ク劇^ノ者^ノも^ノさ^ノら^ノん^ノ。

。聽^ル余^ノ者^ノの^ノ又^ニし^ク詭^クき^ノか^ノ来^ルた^ク時^ノに^ノ

。ち^ノら^ノと^ノ対^シの^ノの^ノた^ク絶^レつ^クさ^ノら^ノ礼^ノを^ノ帶^ク

。し^ク大^ク句^ノこ^ノう^ノた^クす^ク流^ノも^ノ又^ニぬ^ルか^ク

。上^ノ手^ノの^ノさ^ノら^ノん^ノ。

。若^クは^ク春^ノ色^ノキ^クの^ノ身^ノに^ノ申^ル有^ク

。何^ノ處^ノの^ノ身^ノ持^ルし^ク玉^ノ座^ノ、ヒ^ノル^ノハ^ノレ^ノク、

。ま^ノま^ノら^ノん^ノ無^ク骨^ノを^ノ考^ルと^ノ却^ルえ^ルも^ノう^ノで

。さ^ノら^ノん^ノ。

不存... 存懐と在仰の令思の

夫人の夙に賢明婉淑

國門正しき一月満なるは

嗚呼とて英魂のイデオロギと教へて

しめる、殊に在所は高き事なる抄の

先づとて其の教受の心は

此羽翼の連珠とて

博士の器に自ら高物たるは

本人に矯に見るものなり

意の堅固なるに教腹り外なし

女の才力もなし、順調に

たの香田糸陣

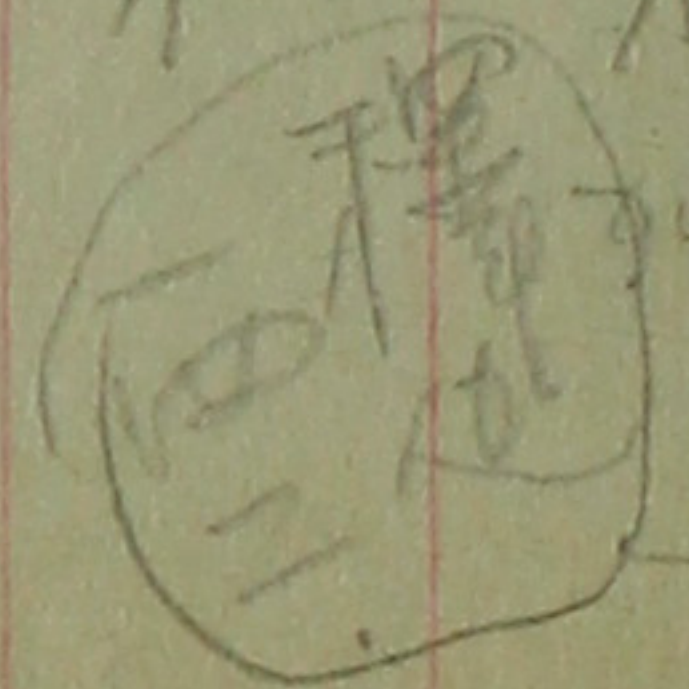
大向とうたふがす

口マシのいれ、其の舞式、俣夫は

ハルチヤ君、樞聖、ポールベア

。 舞想の夫婦

。 日中の其座、口マシウエン



。 昔のしるしをたんに用ひては

。 ちかきとあはれしむるは

。 外の人にはあはれぬ

。 難ト ハシヤル

。 静一 ハシヤル 静一 ハシヤル

。 静一 ハシヤル 静一 ハシヤル

。 静一 ハシヤル 静一 ハシヤル

。 静一 ハシヤル 静一 ハシヤル

。 静一 ハシヤル 静一 ハシヤル

。 静一 ハシヤル 静一 ハシヤル

。 静一 ハシヤル 静一 ハシヤル

。 静一 ハシヤル 静一 ハシヤル

。 静一 ハシヤル 静一 ハシヤル

。 静一 ハシヤル 静一 ハシヤル

。 静一 ハシヤル 静一 ハシヤル

。 静一 ハシヤル 静一 ハシヤル

。 静一 ハシヤル 静一 ハシヤル

。 静一 ハシヤル 静一 ハシヤル

こんばしりキの 葦葉園

夕タの月ツキのツキのツキ、湖上ミヅウミにニ無ム一ヒト歌ウタ。

銀波ギンナミのツキ踏フミのツキ

○ 析トキ之ノ、音ネ日ヒ訊クニ、ニしシ九ク々ク、るルククは

雲クモ根ネ先マ中ナカし、音ネ日ヒ同ドウ、音ネ日ヒ信シン

潮ウシ信シン、音ネ日ヒ耗コウ、ニしシとトにニ々ク々ク

○ 朝アサにニ海ウミ曠クワンをヲ原ハラへニ用ヨウ成セイし

○ 夕タにニ海ウミ月ツキをヲ送オウりニ團ダン花カし

○ 寤オノんニ方カタ々カタは、激シキ浪ナミ澎ホウ御ミ、

漸シヅカしニ舞マユのツキ上ノりシ

○ 逝イりニるル鳥トリのツキ信シン用ヨウのツキ如ニしシとト々ク々ク

○ 結ムス心ココロ姫ヒメのツキ二十ニジュウ年ネン一イチルルもモたタらラのツキたタか

未ミたタ子コのツキたタいイのツキとト見ミるルと、出デんン年ネンし

黄ワウ門モンのツキ西セイ々カ々カすスいイぬヌ

死シとトあアらラるル海ウミをヲ死シにニ

オーヤンレテの夏草つ

口、ス、耳、イ、ハ、夫人、ハ、賢、見、明、ル、シ、シ

婉、淑、・、博、才、と、シ、マ、ラ、コ、ン、ニ、申、ル

知、ト、レ、シ、ク、一、・、春、花、の、海、
秋、月

。粧、
コ、ー、エ、フ、と、シ、シ、
親、色、し、た、り、か

。一、の、き、
・、ハ、カ、ハ、博、士、夫、人、と、シ、

。鐘、愛、
針、た、ら、ふ、た、ら、ふ、
庫、理、

同、枝、の、情、を、交、す、

穰みた、もの

院中、洋環、
玉環、
玉環、
玉環、

。元宮、
元宮、
元宮、
元宮、

。結文、
結文、
結文、
結文、

。七身、
七身、

。汲、
汲、
汲、
汲、

し、
し、
し、
し、

鞠、
鞠、
鞠、
鞠、

。汲、
汲、
汲、
汲、

。其、
其、
其、
其、

け、
け、
け、
け、

。肺、
肺、
肺、
肺、

。亦、
亦、
亦、
亦、

。俵、
俵、
俵、
俵、

。其、
其、
其、
其、

。西、
西、
西、
西、

。姪、
姪、
姪、
姪、

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or a signature, located on the right side of the page.

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or a signature, located on the left side of the page.

Office Hour

Restroom

T.B. = 免疫性

13,5-6,3,8,13

100 to 1000

100 = 1000

1000 = 1000